

がらくたの身体と知る二月尽
 千両がとても綺麗に年の内
 木の葉などがらくた懸り蜘蛛の網
 忘年の星に酔いどれ天使かな
 心臓の音のとつくん冬紅葉
 散髪の頭こつんと秋の風
 冬雲の何處其処染まる立話
 楓もみぢ霜にやられて仕舞ひけり
 玄関のポインセチアに一ア安堵
 おいそれと君には逢へぬ嫁が君
 さざなみの滋賀の都へ旅始め
 其のこゑは誰それのこゑ寝正月
 よみがへるをみなの面輪初灯明
 大榎の無頼派櫻の常識派
 俳壇てふ浮世の序列賀詞述ぶる
 のらくらと陽炎主宰月旦評
 掴みどころ何処に陽炎主宰選
 蠅叩き俳誌「陽炎」主宰とぞ
 宝船ツアーなるものなかりしや
 首尾問へばまづまづの出来松手入れ
 氷上に鳴って小石を吹ける風
 三田四国町薩摩屋敷跡空地
 こそついで薩摩っ原の寒雀
 年を祝ぐものの裡なる藪柑子
 本詰まる部屋の煤掃き手抜きして
 教導ふう面授なるもの墓を前
 粉雪の舞へる景色も堅田風
 靴音の吾に蹤きくる冬至かな
 数珠玉の花を毎朝愛でに爺
 さざなみの滋賀の睦月の諸仏見て
 輦台（れんだい）に乗れる初夢大井川
 練達の土なり堅田の鴉
 一所用ありて読み出す新年号
 独善は他にも及ぶ鳥兜
 かははぎの顔を迂闊に造物主
 マンボウの顔を造るも造物主
 小振りなる鏡餅など割るでもなく
 駅前の木のかしこ聖樹の灯

吾も又息を止めぬる鰐を見て
 首筋より日の差し込める初電車
 消しゴムの消し屑吹ける小晦日
 年内に片づけるもの抜書きす
 冬至経て暖き日の二三日
 炎帝に顎を預けて鰐眠り
 煤の日を勇名（いさな）回遊せるところ
 枯れ枯れの篠のあわひに冬すみれ
 亀鳴けり板を使はぬ上木に
 水槽に狎の顔しておらんだは
 三伏の睡魔に顎を預け鰐
 葉牡丹の二株ほど代書屋に
 水仙の蒼正月支度して
 去年今年殖えて似非虚子小物虚子
 力在るものと格闘初夢に
 近江への旅を思ふて初御空
 正月帰省ラッシュかがよふ陸と空
 寺町の軒並み小家輪飾す
 風向きがガラリ変れり海鼠突
 干蒲団大つごもりの日の匂ふ
 町内に枯木と月と銭湯と
 銭湯の富士に長居の小晦日
 銭湯の富士の淑気を浴ぶ男女（なんによ）
 海道の松の高みに湯屋霞
 羽衣の松越しに見る湯屋初富士
 銭湯が未だあり大つごもり月夜
 月あるを確かめ戸閉す大つごもり
 犬小屋にわんとも云はず冬籠
 出不精の犬犬小屋に小つごもり
 脱衣籠使はぬ湯屋の小つごもり
 おおよそのところ桃の木樹肌より
 数え日の在庫なければ丸善まで
 人は皆何か引きずる大つごもり
 雑念の渦巻くごとし葛湯とく
 まあまあとゐなされてゐて初寝覚
 初夢の思ひ出せずにある科白
 澄江堂句集閉して夕ごころ
 味と云ひ見てくれと云ひ下仁田葱
 日本は借金大国寝正月

ここへ来て株価も下落枯木どき
第一步堅田にしるす旅始め

寝正月返上しての近江行

落つるより他なき滝の水割けて

お不動の零れ焰の鶏頭花

ぷりぷりの太股柚子湯透きとほり

金澤動物園

青空の思い出とありキリン死す

素もぐりの理屈は抜きの鳩

水弾く甲州葡萄に力あり

小粒なる葡萄摘むに千手欲し

梅もぐに程よき力使ひけり

半島のかぼちやの花のパッパラパ

あらためて大海牛の目鼻立ち

鳥雲に行き詰まる時古俳諧

酔ひつぶれる如き身持ちの身不知柿

夏草や俳壇に撒く除草剤

衣食足りて何の平成俳句哉

ぎうと押しへたとへこみぬ干蒲団

宝船ツアーといふはなかりけり

もう一つ呑み込めないでゐる海鼠

歳旦吟言葉飾らぬ生地の佳さ

火事を見て人ごとならね団地族
煤掃の妻勇しき限りかな

芸術劇場 高橋竹山 孤高の響き

年の瀬に竹山遺す竹山節

竹山のやあやあよされに年を越す
ぶつつけて太棹鳴らす凍れ撥（ばち）
じゃみせんじょんから坊様（ばさま）に蹠

きて雪の原

顎引いて太棹雁のわたる空
凍むや門付一から学ぶことばかり
吹雪く町門付三味線剥げるまで

竹山来る青森の野の風の中

いいしびれ求め返つ日のよされ弾く
太棹に津軽が見える雪んこ見ゆ

雪んこに太棹あやつり津軽の音（ね）
音色凍むほんにしゃみせん授けもの
雪原をゆくごと爪弾く地藏顔

夕凍みの棹哭く三味線うまければ
津軽雪んこ撥が当れば棹が鳴く

馬面の竹山切な返てあいや
津軽あいや凍る心に灯を点す

春の華やぐ音色即興曲岩木
雁ゆかせ津軽よされの高調子

即興に竹山遊ぶ年の暮
ぶつつけてしゃみの音飛雪の津軽出す

竹山の門付了り凍る山

初日の出金色の波砕けけり

落葉搔き寄せて無人の建長寺
初伊勢や鳩のくぐもりごゑの中

底冷の最たるものに比良比叡
九条葱などゆかしき菜（さい）の名も
謡「竹生島」

面白の浦の気色は枯蘆に

初伊勢の苞の赤福餅（あかふく）頂戴す

寒諸子薦めるこゑも華やぎて

芦の上近江の國の新霞

鳩潜く豊葦原の瑞穂の國

芦を吹く風の音にも近江ふう

枯芦の水路は鮎の通りみち

坂本の石と語らひ居れば鴟

寒貧（かんびん）の叡山冬の鴟啼けり

素寒貧冬の鴟来て啼きにけり

鶴鴝の遊べり石の浪人と

「石の浪人」とは石工の用語で後で要るで
あるうと

思つてその辺に転がし置く当座の組み上げ
に適（あ）

わない石のこと

阿のく多羅三藐三菩提（あのかたらさんみ

やくさんぼじ）鴟鋭声

比良明神しゃなりしゃなりと雪降らす

何もせず日が打ち過ぎて大つごもり

枯葦原陰れば陰る湖明り

一掬の枯芦映る湖の水

文庫（ふみくら）や月憚りて虫細音

妻に折れ近江初旅端折りけり

小正月過ぎて入江の葦刈ると

定年近く年の港に舫ひける

こんな句が先師にありて初昔

乱心の松の廊下の松の内

霜に遭ふ楓もみぢの一試練

とりかへしつかぬ楓の錆もみぢ

贗繭玉三日天下の華やぎとも

にんじんの赤は滋養と再三云ふ

云ひ止して直ぐ云ひ直す白息に

云ひ方の何處かが違ふ冷し酒

よく働く古自転車に輪飾す

祇園の辺歩いてみたき注連の内

大時代めく物言ひも年始状

大向ふ唸らす思ひある吉書

寢床にて歳旦吟に手を入るる

寢床にて読初め朝はもつたいたなく
青き踏む桂信子はタツタツタ

松瀬青々に「宝舟」なる俳誌あり

天明調舟唄をもて宝舟

湖を見て十一面の観世音

まだまだと寢床にをりて小晦日

新年初頭

これからと思へる年の長丁場

俳人に来し方ありて初発句

正月の地蛸たじたじ歯の無くて

枯櫻まがふことなき幹の艶

散髪へ日当りの径小つごもり

初旅の金引き出せる小つごもり

がちやちやんと大つごもりのレジの音

抱へ来て妻の実家の実千両

茶天鷲絨（ちやびろうど）かなぶんひつく

り返りけり

ネクタイ結ぶ御用納の日は茶鼠

初昔雄ごころを浮き立たすもの

新霞立ちあらはれて竹生島

麦の芽の靄欲すれば靄かかり

近江路へたんぽぼのほとりより

大みそかラヂオ朝から喋りづめ

面白の受け手大事や醜（しこ）紅葉

間石忌旧態是を打ち破る

俳諧國旧風破る鶉のこゑ

人の来何処かへ去る新霞

頑としていふこときかぬ冬將軍

姫始め野暮な句解を凡手して

痴呆性たんぽぼの絮野を覆ひ

割箸の如くに橋や比良暮雪

大津なる町並みの上湖皓々

鬼子母神天

三井寺の虫の闇より訶梨帝母（かりていも）

湖西線巡り折しも比良へ雪

数へ日の段取り交はす寢床にて

立ち寄りて年の港の吾が舟も

ピザ焼いて年の瀬のびのびせる一々日

時節なくけじめなき年又逝かす

閑伽井屋に秋の風吹く園城寺

冬浪の白起つばかり鯨望荘

妻の使ひなどして数へ日潰しけり

力仕事数へ日潰すにうってつけ

玉の緒に安息とらす年の酒

竹生島めがけて鳩の突っ走る

初刷の妻指すところ拾ひ読み

双六ではないが今回は夫婦弥次喜多京の旅。

先ずは近江八幡の枯芦を遊び舟より見てと算段したものの代金はチト高う舟一パイ八千円也で断念。

日造（ひえ）神社に詣で八幡山の村雲御所へ。眺望は目前に雪の比良 群青の琵琶 幻の安土城。八幡堀をみて三井寺へ。

返す刀で義仲寺。蕉風門葉の某々にご対面。ここで日暮れて膳所で一泊。翌朝は石山寺を皮切りに穴太積みの坂本西教寺へ。

版画好き友人の今年の賀状は西教寺石仏なれば先ずはそを見んものと。ケーブルで比叡にのぼり大講堂では祖師さまにご対面。蓮如堂でしづり雪を聞いて下山。

湖をぐるりと巡って次なる処は嵯峨念仏寺。

時間なければタクシーで。降りれば雨か。

「お客さん時雨と言ってください」とは運転手。祇王寺 去来の墓と回って落柿舎で日が暮れた。三条で一泊。

さてあくる朝、粟田の御所即ち青蓮院門前で開門開門とやれば門ようやく開いて一番乗り也。JR東日本の「京都へゆこう」の広

告写真はこの地なり。小一時間ほどいて俳句は大漁大漁。八坂神社 二年坂 清水と足早にまわって紀州はお伊勢さん外宮へ。ぞろぞろ人の背について参拝すれば内宮への循環バスあり。飛び乗って降りたところが「乗合自動車内宮前」。こんな看板まだ生きとつた。真つ暗の中を賢島にて一泊。さて翌日は大王崎は波切の潤目鯛干し見学。

海産物をしこたま買い込んで家苞。鳥羽に回って湾内遊覧船巡りして御木本真珠島見物。赤福餅を最後の土産として帰横。

以降はとれたての俳句でっせー。

近江八幡 安土

おめでとうさんと近江の田鴉に
山田にさす日差しほこほこ三々日
初鴉安土の刈田とんとんと

枯芦のものがれず残る穂先あり
近江八幡刈田芦原風つづき

ぼろぼろに蒲の穂絮の飛び損ね
三角のそれが睦月の竹生島

枯芦に耳傾けて白鷺は
人里と水を隔てて葭雀

茎掴みそのまましなふ葭雀
茎蹴つて雀発つなり枯尾花

あをあをと冬草近江の田鴉に
枯芦生ふ干潟の泥の照り陰り

刈り頃の芦擦りあふて湖日暮
石組みに二日の日差し八幡堀

枯芦の陰よりすいとかいつぶり
近江ふう初商の店構へ

枯芦原二日の風を聞くばかり
枯芦に水路に風の吹き込めり

うすずみに丘たたなはるかいつぶり
枯芦原日向の贅を尽しけり

村雲御所
若菜野の近江八幡一望に

葉が皆落ち四辺明るき村雲御所
たまさかに日当たるは贅枯葎

古草を濡らし安土の雨通る
注連飾り大きく近江兄弟社

あなたなる安土の麦の青霞
芦原に一句捻るか白鷺は

若菜野へ近江八幡葭雀
枯芦の刈取り日和と呟ける

芦間より二日の鴨の一連隊
日吉（ひえ）詣で近江商人裔のもの

初山河安土の方に目を遣りて

村雲御所

冬の靄安土見えたり見えなんだり
枯芦の日に眩くを俳言と
枯芦の繰り言を聞く風の中
枯芦に対す先師に対すごと
枯芦を見るをことしの足慣らし
漕ぎ行けばみよしに枯芦当る音
枯芦に凝る露つゝとはしりけり
枯芦をあほれる風も近江ふう
にほどりのあふみに隠れごころかな

三井寺

弁慶の怪力並みや除夜の鐘
滑り来て三井の鐘どきゆりかもめ
琵琶湖疎水一条枯木真つ只中
三井寺の夕凍み及ぶ大黒天
三井の鐘立ち去る耳に凍みつきて
運の尽きならぬ凍み鐘突かれけり
経蔵に防火バケツの二つ程
三井の鐘菩提樹の実を震はする
三井寺の鐘にひた枯れ烏瓜
晩鐘を三井の仁王と聞く二日
立ち寄りて三井の鐘どき寒鴉
凍みる中そもそも三井の鐘由来
三井寺の閑伽井鳴りづめ大旦

義仲寺

山吹の塚と云へるに菊手向け
蝶夢
初夢に栗津文庫の幻阿坊
駈け巡る夢のほとりに枯尾花
墨痕は正風宗師淑氣帯ぶ
破魔矢持ち膳所で降りたる夫婦かな
義仲寺の水の面の冬もみぢ
義仲寺のしろがねいろのさるすべり
夕凍みのはかや也有の文台に
暮れのこる八つ手の花や辞世句碑

供花の菊いっぽん生き生き曲翠墓

枯蔦の一条はしる翁塚
夕早み芭蕉葉の枯れ芭蕉塚
義仲寺の門前寒し東海道
木曾塚のうしろを吹けり枯木風
義仲寺の芭蕉の花の蜜に蜂
春小袖二人連れなる巴寺
義仲寺の葉を大切や枯れ芭蕉
春惜しむあふミの人と真蹟句碑
義仲寺に暇嵬越し枯れ芭蕉
冬の虫一匹すがる巴塚
木曾殿の塚の冬菊二々二色
堂守のすすめれば
味ふて珍（うづ）の芭蕉の花の蜜
巴塚寒木瓜弾け一二輪
中興の蝶夢法師の嚏堂
齋生ふ朝日將軍墓所御前
供花絶えず絶やさず寒への巴塚
朝日堂位牌
でかしたる丈艸が牌堂寒し
その昔膳所で越年都鳥
木曾殿の塚に裏白侍らしめ
義仲公墓所の寒木瓜一二輪
木曾殿と並び翁のしぐれ塚
若冲の花弁図拝見初時雨
でかしたる丈艸の墓つつむ寒へ

巴塚葉欄を鳴らし至る雨

巴塚風擦り抜けて枯れ芭蕉
義仲寺の墓雪白に寒暮急
万両は燭の明るさ巴塚
寒木瓜の一輪発句吐くごとし
膳所泊り夢に行き交ふ初飛脚
蕉風の門葉塚に枯芭蕉

石山寺

石山寺詣にちんちん初電車
石山の仁王脇抜け初詣
石山の諸堂諸仏にむつみ月

石山寺郵便局の大根注連

多宝塔

石山に初日挙げたる大日如来さん（だいにち）

石山の仁王の肩に初日差

石山の石に実生の南天生ふ

屋根普請そのままにして年越しや

石山の石に躡く裘

石山の石真っ黒におさがりす

石山の石恢々と冬もみぢ

石山の仁王の塵も松の内

兜抜毘沙門天に水菜あげ

寒鯉にぬつと寒鯉割り込みぬ

石山寺初日の当たる堂柱

びんづるさま凍りて堂の隅っこに

乗初の石山寺行着きにけり

石山に遊びごころの蜷汁

石山の諸仏諸仏に笹鳴けり

櫟や石山詣適ひけり

掃初めの箒立て掛け寺門脇

石山寺の高張掲げ笹子みち

初躡き石山寺の石畳

石山寺塔頭覗けば蓬菜台

その他

窓に富士膝に初刷手に眼鏡

東海道白妙の富士皮切りに

米原を過ぎて軒のかき始め

白妙の富士に瑕瑾といふ言葉

初刷を発利（バリ）と車中に響かせて

毛利輝元寄進経堂

輝元は一切経堂寒々最中

案の定前原過ぎてべそかき空

神鈴をがらんと一つ年歩ます

この方はぶちやうほうして年始状

まんぼうのゆうゆう自適志摩の春

坂本

白檜の木よりずり落つ雪の音

うすらひにまざまざ透ける朽葉いろ

雪載する比良に目覚めてかいつぶり

里坊の石庭に雪まじり雨

鶴鶴の石掠め飛ぶ枯山水

里坊の一葉も欠けぬ枯柏

里坊に雪やこんこん穴太積み

比叡より一雨あるか実南天

読初めに「大愚のすすめ」手にしたり

朽葉みち坂本は水奔る町

浮御堂水鳥発てる音はるか

近江ふう言葉にて賀詞申されき

楽浪の比良に初波立ちにけり

坂本は水奔る町雪しまき

里坊の柿の蒂見て夕暮れは

枯蔓の一条はしる穴太築き

枯木山根本道場中腹に

穴太築き石垣に触れ木の葉落つ

万両に下駄相向かふ枯山水

からかさ負ふ鬼の天津繪しぐれ宿

竹箒一つに束ね掃納め

寺聞けば霞む山指し穴太人

叡山の凍みもたらせる水神さん

万両の数庭石に適ふ数

日吉大社

山の実の色を盗みて日吉（ひえ）造

石橋に落葉水底に去年朽葉

多羅葉に一雨あり日吉（ひえ）造

着膨れて山王さんに頼み事

坂本衆山王さんへ年祝ぎに

西教寺

冬もみぢ俗塵払ふ麓寺

沓て廊下猿候の間をうち覗く

菩提樹の冬ざるる実の光秀墓所

藪巻に雪まじり雨比叡より
また来たか笹子ついつい堂障子
注連縄に琵琶の初東風大師殿
藪巻の蘇鉄によきによき脇寺に
山墓に猿候が出て山の春
西教寺坂道即ち笹子道

琵琶湖

疾うに鳩目覚めて居りぬ堅田寒
瀬田唐橋くぐり遊びの鳩一つ
湖べりをそろそろはしる初電車
おさがりの少々瀬田の唐橋に
大津京辺り過ぎれば枯櫻
みづうみを初手に染め上げ大日如来（だいにち）さん
御降りのみづうみ魚（とと）の腹光り
大津繪の奴の部屋に膳所泊り
雪来るかみづうみ鮎色やや深め
みづうみの藍際立ちて雪の比良
芭蕉に大津繪に筆の始めは何仏の句あれば
買足せり筆の始めの追分繪

比叡

叡山の薄雪透きて朽葉いろ
ケーブルに新々の雪見え比叡山
本願はたのめよ南無の一つ橋
踏みはずしな三途川底
蓮如堂つつめる雪の雫音
叡山の何か云ひしかしづり雪
叡山の寒貧（かんびん）骨の髄にまで
大講堂
祖師さまに届けと落つるしづり雪
峰巡りはたして雪気ふふむ風
叡山の躰の水気抜きに寒々
法燈や堂の黒凍み突き上げて
叡山の谷に突き出す初廬

朽木に雪枯木に雪の奥比叡
息白く根本中堂常闇に
叡山の寒々を背らに阿のく多羅（あのかたら）
蓮如堂杉の撥ね上ぐしづり雪
叡山の寒気太股締めつけぬ

冬鴟の懸命のこゑ奥比叡
根本中堂香炉の煙も凍らんか
叡山は法城しづり雪おどろ
底冷えに妻縮み込む蓮如堂
根本中堂うしろの闇の今昔
堂凍みの燭の長・短・長・短
黒凍みは根本中堂突き抜けて
叡山の寒気柱の朱々剥ぎに
叡山の寒気払はん鐘つきて
阿のく多羅（あのかたら）こゑから先に凍みにけり
大阿闍梨真言唱え深雪道
叡山の杉もおどろのしづり雪
叡山の堂の常闇凍むばかり
手探りの根本中堂初燈明
根本中堂入りたれば咳度しめよ
堂柱寒気拾本連ねたり
しづり雪をりをりありぬ隣り谷
あをあをとみづうみ置かれ初比叡
ここよりは雪に埋もれ阿闍梨徑
風花の舞い込む三塔十六谷
大津繪
大津繪の太夫着こなす春袷
大津繪の鬼のねぶつは寒念仏
大津繪の春さきどりの藤娘
大津繪の弁慶かざすなぎなた寒
大津繪の鬼の散財松とれて
大津
かいつぶり潜り出でたる比良面

鳩の鳴く膳所来てみればもう日暮
行き来して鳩の遊べる堅田ベリ
比良夕風一々吹き鳩の尻押せり
覚め際のこと一つしてかいつぶり
夕凍みの膳所過ぐ翁の顔が見ゆ
水破る音も夕づくかいつぶり
昂ぶるは鴨かいつぶり比良に雪
かいつぶり潜けるを見て壮ならず
春を待つ近江に心預けんと
みづうみに諸子取れ出す白伊吹
嵯峨

どの家にも南天の実や嵯峨歩き
馳せつけて嵯峨のしぐれに遭ひにけり
まとまった景なり小倉紅葉山
朽葉どき蓮台野より化野へ

祇王寺の時雨木立のたたずまひ
祇王寺の竹林昏め一々時雨
蔦紅葉清盛の籠一心に
しぐるる中戸を閉す化野念仏寺
うしろより蹤き来る嵯峨の夕しぐれ
うしろにも前にも嵯峨の時雨ぞら

青蓮院（粟田御所）

水平に菰戸比叡より小雪
雨ならぬこれは時雨ぞ一乗寺
掌を打てるところへ寒くの御所の鯉
杉戸絵に京の底冷え極まりぬ
千両の實が丸見えに御所の鴟
明け方の寒禽弾む御所の楠
枯櫻の走り根茶庭の贅としぬ
粟田御所大玄関に万年青活け
庭石の紀州青石鶴鴿来
竹林の寒気に殺気粟田御所
朝まだき御所の寒鯉かたまりて
踏みしめて寒気ずんと御所畳
竹林の寒気徹るや門跡寺

板輿に鴟の高声徹りけり
朝拭きの堂縁濡るる実南天
青蓮院朝のしばれ廁借る
寒鯉の叡智めぐらすごとくなり
雀らにまだまだあるぞ実南天
御所に来る尾長を愛でて初座敷
粟田御所左近の小木の枯櫻
遠州の作庭冬日に遊ぶ石
近在は楠多くして目白御所
宸殿に冬鴟のこゑ徹りけり
初声に御所の大楠千手垂れ
粟田御所千両の實を盗りに鴟
粟田御所朝一番の尾長来て
粟田御所回春楠の常緑
大楠が見事な御所の淑気帯ぶ

清水

三年坂「雪やろ」「そうやろ思ひます」
清水の小雪おっとり店構え
初夢に掌を合はせある吾が見ゆ
角っこの三文駄菓子屋初商
春著の子行き交ふ八坂に足踏み入れ
買初めは大黒天の福財布
裏白の山負ひ清水寺舞台
正月の坂のぼらねば高台寺
一山の枯れ清水の舞台庄（お）す
初比叡京都半分日当りて
冬木の芽隆々観音力もて
三年坂連れ立ち降り来春小袖
買初めの色のほのほの五色豆
清水の舞台もろとも枯れ一切
冬木の芽舞台支へる丸柱
清水の舞台に佇てば枯れ一望
心ここにあらず清水春舞台
清水の一々谷楓もみぢかな
枯山の一方に塔清水寺

落柿舎

落柿舎の昏れよ昏れよと鴟鳴けり
冬鴟のぎうと落柿舎暮れにけり
柿落下注意と落柿舎庵主の札
落柿舎の夕凍みの憑く柿古木
落柿舎の時雨に遭へる唐ネズミ
落柿舎制札
俳諧奉行去来の庵に夕鴟来
柿主は小倉山下儒医去来
暮れかかる柿の蒂みち落柿舎へ
古る柿に庵主去来の為人
落柿舎の閉門氣遣ひ歩めば鴟
落柿舎は柿の古木に募る夕
落柿舎の年初の苔の常みどり
落柿舎の前の畑の若菜摘み
落柿舎の柿の蒂ほど吾も凍みて
落柿舎の廁に聞けり枯木風

去来の墓

去来の墓いかにも時雨来さうな空
しぐるるや黒みてここに去来の墓
時雨中踟むところに去来の墓
凡そ天下に去来の墓はしぐるゝのみ
柿の蒂柿の古木にくろぐると

初伊勢

初伊勢の遅れて参る人に遭ふ
初伊勢や腰の曲がるも何のその
春小袖うつせる五十鈴川の水
祈ぎ事も通りいっぺん初詣

初伊勢やをろがむ顔も魚のごと
黒凍みの五十鈴川搔き昏れにけり
夕凍みの玉砂利踏みしめ巫女三人
詣で日の天氣がようてお伊勢さん
をろがめる大御親神（おおみおやがみ）伊
勢の春
家苞の破魔矢携え伊勢巡り

初伊勢や守武ぶりの一句出来
初（はつ）に詣でて土の宮風の宮
初伊勢や楠に交じりて榊大樹
初伊勢や人の流れに就くばかり
初伊勢の交番で問ふ風の宮
初伊勢の大楠の森肅然と
柏手のはつしとゆかぬ伊勢詣
お伊勢さま詣でのゑびす顔続々
初伊勢の玉砂利鳴らし往路帰路
初伊勢や車の護符もお伊勢さん
お伊勢さん詣で人出のえらき道
初伊勢の外宮内宮循環バス
初伊勢の点り初めたる常夜燈
神域の初鴉よく啼きにけり
内宮より外宮へ廻る伊勢の春
春著の子のうしろに蹤きゆくお伊勢さん
人波に揉まれにきたり伊勢詣
神宮の大楠の森凍みて来ぬ
春著着て乗合自動車内宮前
内宮も外宮も詣でお伊勢さん
初伊勢や官憲筋の五六人
大楠の風に纏るる初詣
踏み均すお伊勢詣の道白し
五十鈴川黒凍みの水湛えけり
お伊勢さん詣で玉砂利搔き鳴らし
初東風に大楠の葉の翻る
初と云ひ伊勢と云ふ語の弾みけり
初伊勢の野鴟の遊ぶ御池かな
お伊勢さん京へのぼれる寄り道に
はばたいて海鵜滑空伊勢の春

京

一見は京の下加茂鞠始め
知恩院裏手黒門寒気絶つ
総門の白かへる股時雨けり
一隅にろうばいの小木西行庵
歳旦吟誦す西行木像に
おけら火の八坂へ遅れ参りせり

二年坂初商の水打てり
繭玉の店の八つ橋よく売れる
坂うまく使ひて八坂店（たな）の春
朮火の八坂神社の巫女のかず
黒凍みの大鴉群れ念仏寺
枯れもみぢ未だ朱々勝ち庚申堂
松過ぎの肉桂のほふ五色豆
京に来て縮みあがりし三々日

鳥羽

御木本像
真珠王背らに鳥羽の冬青空
水槽に正月顔のマンボウも
浮寝とはゆかざる鳥羽のゆりかもめ
遊覧船暇にて釣るは目張なり
日当たりて鳥羽の水鳥真珠粒
初夢の飛ばないものにシロチヨウガイ
海鵜とは一目羽打ちの容見て
あわび取り海女図何より涼しさう
買い初めの真珠の趣向人さまざま
春先の貝に生まるる真珠質
海に入れ幾冬真珠の養生籠
寒風裡真珠段籠打ち沈め
ブラック系真珠好みの春ショール
初春の真珠選別御木本嬢
真珠の好み女の数ほど初商

大王崎

崖椿また一つ落つ熊野灘
潤目鰯の腹麗しく干すべかり
冬潮の透けて鮑の産卵期
さぼてんに真冬の熊野灘の照り
寒釣の礁に鴉の濡れ羽色
枯篠の沖にあわびの産卵期
寒釣の人か礁にやどかりめく
明日葉に子守唄めく冬の潮

初東風に海老網舟の尻振れり
ふくらんで縮んで釣られ河豚の腹
さやゑんどうの白花波切（なぎり）日和か
な
うるめ干す美しく干す波切の婆
燈台を左廻りに寒日和
初雀波切の路地をひゅんと抜け
二々灘を左右に波切の豆の花
霞む方遠州灘と誰か云ふ
虎河豚に三段腹はなかりけり
正月の波切の磯に河豚を釣る
ゆりかもめ女顔をすいと寄せてくる
大振りよ大王崎の干し皮剥
うるめ干す縦横斜め干しは無し
冬麗のまいわしうるめ干し広げ
海底に荒布ゆらゆら三々日
初東風の煽り喰らへりゆりかもめ

水鳥はしばらく水に蹤きゆけり
 柄物を着こなす鴨の立話
 水鳥に水の一年明けにけり
 走り根に蹟くことも年の内
 反橋を年よづ如く登りけり
 俳諧の花おのづから自他の春
 まばたきして寒の入よと妻云へる
 寒鰯の如き山妻寝正月
 じつとしてやりすごす冬もう少し
 そうなのよけふから寒の入なのよ
 初東風に伊勢の神々耳すませ
 松とれて心の内に頭上ぐ虫
 歳旦やからかひ心大事とし
 近江路の枯芦見んとそぞろ神
 枯芦の葉屑浮く水動きをり
 見識と破格問はるる梅の花
 人の器大小は措き歳旦吟
 心臓の動き具合もおらが春
 俳諧は破格破格と木菟の云ふ
 左義長の煙の黄竜昇りけり
 とんど火の交互に松の竹の音
 左義長の煤け顔して戻りけり
 左義長の大役干支の火付け役
 左義長のありし日の髪煤くさき
 いやはやの島の階（きざはし）初弁天
 まんぼうはまんぼう泳ぎ春隣
 心臓は血送る臓器寒の入
 枯芦の放てる光さざめく波
 鏡割僧職の出の学芸員
 みづうみは鮎色深め雪催ひ
 端っこの端っこの枯芦にも夕日
 枯れざまの見事ち云へばあふみの葦
 枯芦の明るさあふみに来た甲斐あり
 刈り頃の葦の近江に足運ぶ
 思ひ及ぶところをずいと青々忌
 ひとまわり上の辰年ぽっぺん吹く
 まばたきつつ妻寢床にて寒くを云ふ
 行々子田夫野人の唄うたふ

かいなでの初心者軽んず鶏頭花
 啓蟄の好きな活字とやな活字
 死神と世に倦む人のむつみ月
 享けとりて心の中に咲かす花
 一卷の終りの寒くにご用心
 手前味噌句はぬやうに瓜の花
 掌に載りて大往生のかりんの実
 句に生氣吹き込む鱈東風吹けり
 湖国ゆくいつもうしろに白伊吹
 気付かせて身につく俳諧花の昼
 消灯の紐引く音も寒の入
 その場てふ空気が大事桃の花
 気が利いてルビが轉る日本語
 花鳥詠俳句は言葉の働きやう
 その説に服しぬ花を鳥をと詠む
 俳諧の詠者（よみて）轉る鳥真似て
 葎切の伝法口調に大分慣れ
 どっぷりと首まで浸り冬至風呂
 建前をとらずにずばり冬帽子
 たたられてあいにくの雨近松忌
 寒木瓜は独語のポーズ句作に似
 愛着の古着のやうな冬日差し
 冬ふかむ近江を心の客として
 この坂道これあるかなの椿かな
 スイトピーできればごめんこうむりたい
 先方の心根ゆかし蕪漬
 冬日に透き山茱萸の樹皮瑪瑙いろ
 恋猫の季節と云ふか黙らっしやい
 平日の氣息確かな年とせん
 翡翠や目を離れたるその隙に
 物価高の一年杉箸割り損ず
 心算といふ字面白西鶴忌
 掛け蕎麦に正月花のはや萎えぬ
 烏瓜絵になるやうなその所在
 猶云へば破格が命歳旦吟
 塗箸の先にあてがひ初諸子
 梅落葉散るにまかせて始末せず
 空風の片削ぎに遭ふ大公孫樹
 櫟のしゃきつと朝が来たりけり

落ちかかる入日多謝とす木守柿
福音のごとき日差しに浮寝鳥
枯枝に鴉景気も上向かず
医師の云ふ引いてはならぬ風邪貰ひ
猪首してぶるんと寒気振り払ふ
初写真その気になつたときに撮る
暁の雲日当たり冬至かぼちや色
街をゆく顔のつるんと冬至の日
極月の大鍋でんぐり返しでんぐり返し
心臓の為に重ね着怠りなく
空風に足を浮かせてちんどん屋
読初めの元気な内の葉の尾
本復はまだまだ龍の玉愛でつつ
弟子といふ韻きのどこか暖かく

保田水仙ロードへ久しぶりに俳句仲間
3人とでかけた。

山菜萹の蒼苔の未だ硬く
冬百日鍛へ抜かれしヤブニツケイ
海渡り安房の水仙見にゆかん
ジャケツ着のフェリー船長舵繰れり
双眼鏡下ろし鶴が降りたつと
枯篠にひねもす東京湾の照り
鳴き交はすは鴨と何鳥寒日和
あをぞらにせんだんの実のふんだんに
わしが嫁に來た頃綿の花摘みし
呼び止めて背負籠振向く蓬みち
一々叢の水仙半分日の差して
水仙の葉剣不動に持たせたし
そら豆の葉に土埃二月尽
元気よく辛夷の冬芽指させる
水仙や村起しとて道繕ひ
航跡は氷の青さ久里浜丸
鋸南町
水仙の里を名乗りて村ぐるみ
雑草のおもしろおかしく枯るるさま
水仙とその他初荷の集荷ピラ
風筋を掴み滑空冬かもめ
枯木の間日の降り注ぐ水仙花
菜の花の一句手帖に書きとめぬ
水仙の咲く道交叉鋸南町
菜の花の翻りをり採石港
枯草の中に水仙花了る
黄せきれい朽葉ひっくりかへしけり
菜を摘める音のほきほき花菜畑
春水の無音の流れ片寄れる
枯れ方といふもとどりどり烏瓜
東京湾フェリー左舷の寒落暉
心うきうき花菜明りの石ころ道
花菜畑ゆらりと背負籠立ち上がる
彫り深くなりし水仙日の傾く

安房夕日いちめん村の花菜畑
飛行機音の真下菜の花咲ききつて
この枯れしものは虎杖かもしれぬ
菜の花に安房のちんちん電車來ぬ
水仙に空気乾燥注意報

乗船を待つ間ぐらぐら冬帽子
山菜萹の万蕾弾け飛ぶ黄なり
水仙の真ん中に立ち風の向き
冬浪の彼方鷗の千里眼
枯草に里人のこゑ徹りけり
この浜に残る一軒白子干
造り手のめつきり減りぬ白子干
鄙びたる椿の落つる音を聴く
包装紙よりストックの首覗く
夕花菜いろの大空鋸南町
枯草を上りては下り天道虫
間合取りそら豆植はる砂地畑
藪巻であらねど妻の着膨れどき
カシミアのコートつつめる胸ゝぬしき
毛糸帽うるさくなつてやめにけり
土建屋風皮ジャンの男尿る余寒
気安さもラッコのごとき御仁かな
俳句は花鳥。考へてみるがよい
毛皮と裘俳諧の色合（ニューアンス）
色ものの女冬帽集合す
雛壇になし俳壇のよいしよぶり
鬼やらひ舞台の仕度急ピッチ
かはせみの眼力疑ひなかりけり
遠からず蛤となる雀これ
啓蟄の土を食みては糞る地虫
あきらかに蚯蚓の機嫌そこねけり
栗飯の味は名案得しときの
着膨れて眠って毎朝東京まで
洋上も師走のローリングピッチング
立春のかちかち道に星仰ぎ
赴任先カード二月のワルシヤワより
立春と言葉も威勢よかりけり
下田兄

養生のその後如何に枇杷の花
浅草のカツ井色の神輿かな
初夢の大まな板に再び乗る
隼人瓜味はさて措き造形美
乗り換えの駅で起こされ暖房車
啼きをると目配せをして冬の鴟
葉蘭の蠅居場所二転三転して
恐らくは霜バリバリの朝ならむ
冬夕焼行きはぐれたる雲一つ
こだはりのなかなか解けぬ隼人瓜
冬鴟の数え足らざる実南天

風邪の身は只昏々と睡るのみ
 昏々と身を折るのみの春の風邪
 密豆出てだから春風邪止められない
 あんみつの黒蜜こそは咳なだめ
 この人の重み睦月の一家集
 咳き込んで地球踏みつけ止まぬなり
 風邪寝して唄ふかもめの水兵さん
 朦朧と風邪の脳髓起ち上がる
 襲はれてあいたた筋肉痛の風邪
 こたびは喉イタイタイウイルス引当てし
 こたびは胸ムカムカウイルス引当てし
 風邪ごゑに食事献立あれこれいふ
 日差す中花片寄れる古木の梅
 風邪の身を起こして冬のいちご食ぶ
 籾殻の音の大きく風邪寝して
 ビスケット○の型に風邪寝して
 寒暁の聞きしに勝る利尿剤
 風邪引いて薬を買ひに妻走らす
 大粒の冬のいちごよ病人に
 とりつく風邪いつそ仲良くしましょうか
 一日を臥して風邪寝の薄まぶた
 お見限りしてをる冬の金魚鉢
 落ち込んで冬の金魚のごとくある
 ぬるま湯に浸りて雨降りお月さん
 毘沙門天祀る岬の椿径
 うすのろの山椒魚（はんざき）に似て風邪
 寝の身
 野毛山動物園
 冬枯れに長寿の象のハマ子さん
 昔日の木の葉降る日の動物園
 咳ヲシテコンコンチキノコンチキノ
 鼻カラカラ胸ムカムカの風邪引いて
 たいくつな昼の風邪寝の尻撫でて
 足腰の痛み抜けざる春の風邪
 いつかんの終りの風邪を引くまいぞ
 寒晴れの電子メールの届きある
 風邪寝して臥せる枕辺日の差して
 風邪引の耳を大きくして寢床

朝寝して雑誌の上の花見行
 マスクして降りる階段覚束な
 マスクするは蛙めききておもしろかり
 マスクしてごろごろする目休ませたり
 マスクしておのづからなる女の日
 マスクして海の方より差す旭
 マスクして懐手して目つむりて
 暗記する目をパチクリと春隣
 マスクして風邪に用心せよてふ目
 マスクして疾うに観念してゐる目
 草の絮人は総じて飽き易し
 振り向くや瓦を鳴らす寒雀
 梅の花唐竹割に二月空
 祖父のごと傍らに山茶萸の芽
 老梅の老梅たる枝若木の枝
 かさかさの手に手の甲日向ぼこりせり
 きさらぎの鋭さを増す木々の空
 入り鉄砲 出女 春風邪 通過せり
 風邪抜けの空気目鼻に心地よし
 目覚めては
 看護婦に渡され春の体温計
 大部屋の春曙の高いびき
 春暁の先づは体温計らるる
 春暁のギブスの男喫煙所
 あまり啼けば猫と云はるる寒鳥
 階段を弾み下れる春隣

七種粥食はぬ世くさすことくさすこと
 齊打ち強くなられし女房殿
 終に一人慚然と渋茶のむ料峭
 隼人瓜姿無類の冬に入る
 茄子漬けて古色蒼然古女房
 危ふしとむしゃぶりつきの大鮑
 ふなばたに鮑抱きつく覗突舟
 熟れ枇杷の一つ一つに氏索性
 起き出してめ鯛の顔の寝正月
 中背の自生蔀そのまんまが佳し
 年寄りの機嫌取りみる茗荷汁
 藪柑子汝も亦とどめがたく逝く
 拗ねて咲く茗荷の花の花明り
 祖父はいつも吾が正面に茗荷汁
 皮剥は天下の珍味火を熾せ
 骨にお湯注いで鱈の脂浮く
 厄介者真葛の蔓を掲げけり
 花木瓜に小馬鹿にされてゐるごとし
 葱食うて性悪人間止められず
 山の滋味みどりは深く草蘇鉄
 美味中の美味の鮎焼き向き変えよ
 伊勢海老のうぬ等の元氣見倣うて
 あんきもに目尻を下げぬ好々爺
 そら豆の花の勝手な思い込み
 けふは鰈の煮付けに一家満ち足りぬ
 お茶の花死して交友何のその
 胡瓜もみなべて薄味妻の味
 茹でごごみには鯉節ぶっかけて
 梅もぎの一年ぶりのこんなこと
 本来の味でゆきたし鯛も句も
 たいがいにしろと牡丹の覗き見は
 おん母の味もさこそと雑煮椀
 水仙の海そら香氣一段と
 一政の目をした平目釣られけり
 愚直なるムツの横顔春隣
 豆腐作りに富士の湧水はんぱじゃない
 草餅の石のごときがやわらかし
 食ひちぎる葉脈即ち櫻餅

数え日のもつさり顔が応対に
 三浦産西瓜に手抜きなかりけり
 沢庵の味も家憲も減びけり
 玉蜀黍トマトに戻せ昔の味
 金沢の下ろす切る煮る蓮料理
 準主役おほせつかりぬ焼豆腐
 海馬
 立泳ぎ人間様より数等まし
 むつとくる素通り畑の青トマト
 鮫鱈は肝ぞと息まきつつ賞味
 海鼠拾ふ相州の浜その昔
 泳ぎっぷりさぞやのサヨリ大安値
 井戸水に冷えて西瓜の真の味
 たんぼぼのいちめん両頬なぶる風
 人間が単純になる湯に夜長
 青胡桃この木とことん優しき木
 たとふれば男の美学冷素麺
 素麺のつゆが難し世の御婦人
 河豚の吻(くち)つき嘘ばっかしといふことし
 大ぶりであるほどよろし牡蠣も句も
 牡蠣を食ふヤツも古物の類に入りぬ
 釣りし人呑まんと鰯口開く
 冬に入る顔決め込んで隼人瓜
 クラス会
 水漬の皆相当な悪ばかり
 東夷でよろし鮫鱈好きで
 心配はご無用顔の海鼠とも
 漬け 煮る 焼く鯛の万能選手かな
 信心を持たずに老ひて根深汁
 下宿先べつたら市のお膝元
 浅漬の大根かぢる心意気
 山独活のかほり絶品のち伸ぶ
 こうばしき焼栗御説ごもつとも
 最肩客ありてべつたら市角店
 煮凝の如き偏見蜚部落
 渋柿の渋持て批評苦言じみ
 自己主張せぬ冬瓜を餡掛けに
 夏芝居長谷川一夫めく河童

地のもののこれ一品と云へば蛸

干し梭子魚（かます）道理で箸がすすむ朝

関取の錦を飾る太郎月

山菜蕒の芽に水晶玉の雨雫

梅の木に雪が舞ひ来てえらい降り

日本橋雪が舞ひ来てえらい降り

通り魔の如くうち過ぎ夕曇

やあやあと挨拶タガメとタイコウチ

みぞれるといふこゑありて曇れけり

寒苦鳥啼いて一々世の中仕切り

年並みに私も頑固筍飯

田村草二手に岐れ風のみち

スーパ一の素性確かと云へぬ牡蠣

啼き初めのつくつくほうし拙宅にて

うなされし如くに夜蟬の世迷い言

懐旧

重吉の芸の奥行初ちちろ

花を詠む人の奥行き句の奥行き

砂と平目見分く眼力夏はじめ

他所様のいただきもののコノコ食ぶ

牡蠣舟のごとく老体漂はせ

聞くとなき話の顛末どぜう鍋

大衆魚マダラの顔の冬親し

だしぬけの初音に興の乗りし顔

「ん？」ここは袋小路か八つ手咲く

不味いのかいやさにあらず八つ頭

ありていに云へば鰻は江戸の味

血湧き肉おどるト伝読初めに

青梅 吉川英治邸など

使ひ捨てなる世に糸瓜束子となる
 山峡の梅の日向に踏み入りぬ
 紅梅に目を奪はるる峡の口
 山の駅降りる音してふきのたう
 春川の瀬音片寄る日中かな
 牡丹の咲ける雰囲気あり煙雨
 今朝咲ける気配濃厚白牡丹
 紅梅の咲けるてっぺんあたりより
 二三輪白梅玉堂写生帖
 こっぴどく母に叱られるのこづち
 毒茸のぞつと血の気の失する色
 忘れぬ汝との出逢ひ思ひ草
 曲げられぬ男子の一言けんぼなし
 めがるかや小雨に煙る道行けり
 新平家書き継ぐ部屋に梅の影
 春川の千々に砕ける瀬音なか
 ビヤガーデンそら豆色の空の下
 三極に突き当る路右に折れ
 ペンネームは玉虫葉裏目借時
 玉堂の浜辺の絵あり紀元節
 心臓の鼓動移りぬ鳥兜
 玉堂筆溪村春色川の景
 偏見はすこぶるつよし車前草村
 春先の風邪こじらせてああしんど
 紅梅の寺山号は瑞鹿山
 玉堂の人物描写雪谿図
 海手より上れり節分経たる月
 サイダーの飲み方いつか上達す
 如月の浸して豆の柄模様
 自転車にまたがったまま花吹雪
 山椒の芽午後から降らなきやいいのにねえ
 ずいぶんと低い鉄棒青桐に
 川縁の辺りの陽気猫柳
 伸びすぎて手のつけられぬ木槿垣
 辛辣のラツの辣菰咲きにけり
 逃げ場無き機銃掃射の甘藷畑

話しまた疎開せし地の甘藷掘
 万両のはなはだ低し海蔵寺
 先代は大の庭好き万年青の実
 つよくなりし世の御婦人に草風
 夏は来ぬ吉川邸の椎の樹下
 暗澹たる山峡の空紅梅に
 昔見ぬ庭木の一つピラカンサス
 人物評ざつくばらんに梨の味
 露の日の顔の輪郭思はるる
 筍のあらぬところに臣福山
 扁平になりて千切れぬ芋の露
 柿のヘタつくづく空がありにけり
 戦艦の陸奥を偲びて林檎の陸奥
 旅先の日暮れ数珠玉垂るほとり
 蕾見て咲けば見事な紅梅と
 三極の咲く家続き街道沿ひ
 枝ぶりに付き古梅は範を垂れ
 湯河原幕山梅の里
 春の風邪鼻むづむづに生まれり
 湯河原の外れ野梅といふを見に
 駅前のスナックかもめの桜草
 眩しさに目をつむるなり春の海
 保養所の庭木みかんの花盛り
 急斜面一際梅の香も強く
 重心をうつしてみるや梅の花
 ねぶかわの駅構内のみかん咲く
 紅梅に白梅を重ね見て
 連なりて春の到来告ぐる波
 たゆたひて春のぬくもり運ぶ浪
 山の梅疾うに匂ひのとんでをり
 梅を見る足をふんばり急斜面
 湯河原の陽気よき日の山ざくら
 山腹の梅は真白き日を返す
 すみれ草それぞれそここゑのあり
 紅梅の唇いろに雨意確か
 梅林に腹擦り翔べり群雀
 梅の花スケッチ型染作家かな
 山風が吹く梅林の端に佇てり
 天性の野梅の白といふべかり

椿ライン通りて箱根椿見に

紅梅に近々鼻の穴寄れる

山梅の咲く急斜面緩斜面

紅梅のまはりの空気うまかりき

これは佳き加賀れんこんの辛し和え
 鱸涼しゅう海中散歩アオリイカ
 哲学者コアラ思索の秋は来ぬ
 腑に落つるごとき椿の落ち方も
 もぞもぞと山茱萸春も整ひて
 あめふらしすいた事して潮溜り
 海陸に鈍器打ちつけはたた神
 虫出しの試みの雷半島に
 誘ひありしだれ櫻の身延山
 しゃぼん玉爆ぜたるびつくり素顔の前
 空梅雨の下駄箱の戸をがらがらり
 スイトピーつまらぬことは気にせず
 辛夷の花干涸らび停年そこまで来
 干潟踏む素足の白くさびしけれ
 人見送り見送らる番何時かは来る
 数珠玉の根元あたりで水鳴れり
 オランダてふ金魚はドレスアップして
 目のせいか折角の花霞みけり
 折角の花が霞んで仕舞ひけり
 夜桜は敬遠無理はせぬことに
 房総物鮑槽よりひっぺがす
 唄にもある花の都の花盛り
 のぼりゆき上野の山の花埃
 花の友樹下を選びて酒の友
 満目の伊豆の大島櫻かな
 このとほり櫻は場所を選ばない
 切り結ぶもの眼前の櫻かな
 沖合に大島さくらふぶきかな
 ゆとりより生るるものに花の風
 初櫻先師に向ひ合ふごとく
 好きな木を一つ挙げれば山櫻
 力づくで渡る世の間のさくらかな
 磁石の針大きくふれる五月山
 櫻の幹叩き鼓舞せる男かな
 花筏新の一枚天へ発つ
 山茱萸の花古ぶ前手を打てり
 桜狩り見当つけておきし処
 楽しんでよるひるざくらあさざくら

夜ざくらを見にゆく元氣既になし
 花は佳し桜しべまで見尽して
 新しき花びら載りし土のいろ
 寒鯉のやおら寝返り打つごとく
 大櫻之ある哉の裁判所
 春の水黙つてゐても春の水
 まどろんで先師が花に遊べる図
 金雀枝の空へ眼の広がれり
 花見るのみ俳句作らず居ることも
 門前の小僧のタチツボスミレかな
 藤右衛門さんのはちまき花談義
 花を見る心ええならええ花見
 ぬるむ水タガメの影がすつと過ぎ
 立子流観櫻心で受け止めて
 詠み難き花の季節も了りけり
 床擦れのやがては消ゆる朝寝かな
 つかつかと寄りて櫻に何か云ふ
 虫出しの雷と知りたる最中なり
 持ち前の俳諧臭さ接骨木詠む
 雨ありてあとは櫻の花次第
 満目の踏みとどまりてゐる桜
 振り返る桜がそこにあればなり
 沿線の桜見ながら汽車ぼっぼ
 沿線の花のもくもく土地の味
 桜の木黙つて通り過ぐまひる
 曙の桜どの木も気を張りて
 人間の勝手放題花を見る
 振り返り見居る桜の年季かな
 わからんと云ひて笑へり櫻守
 次の世に花を咲かする桜植ゑ
 日本の櫻を他国に植う話
 花も又花を了へたら一服す
 ソメイヨシノ保つてたかだか百余年
 取り戻す旅の一つに花見行
 さくらの芽陽気水気を溜め込んで
 年寄ったなりの咲き方桜もす
 名庭園ならんとさくらの木も努める
 ソメイヨシノ
 人間が構つてやつて咲くさくら

咲く桜暦代りの世も絶へて
花噴いてぼこんぼこんの桜の幹
絶え間なく風の吹き込む山桜
鳥啼ける中に桜のほころびかけ
こんな具合に接骨木の芽の出方
思ひも見よ山の桜の根の張り方
地味ありて大きくならぬ桜の木
史記列伝桜は花つけ葉をつけて
桜には桜の営みそを通す
花を吹く風に気持ちを切り替へて
開きかけちよつと寒いとすぼむ花
曇り日のささとすぼめる朝ざくら
細工ものにとつてもよき木山櫻
さくら花芽あたりの様子窺つて
他愛なく花を見てゐて旅ごころ
二分咲きと聞きて気になる山の雨
男気の廃れたる世の羽抜鳥
満開の花に吹き込む風見たり
芹摘のじゆくじゆく水に足とられ
野暮天のソメイヨシノといふ勿れ
ほこほこと花の下ゆく朝のみち
ちよこちよこと雀が動く花の枝
昼下り自転車来てさくら狩
ご老人梅と桜を取り違へ
地べた発ち直ぐに雀は花の鳥
萍のとつつき方といふがあり
兎飼ひし昔の山に草が生ひ
干上がって仕舞ひ萍おだぶつに
やつと花咲く辺に汝を偲びをり
芹摘に声を掛ければ腰上げて
滑りざま土むきだしに花きぶし
とつつきの桜並木の端のさくら
花開くまでいろいろな事があり
花房に雀溺るるごとくなり
指差せる指先ほのと初さくら
小粋とは物は云ひやうペンペン草
落椿はつとばかりに土覚めぬ
花降れる地べたに雀色動く
花を見る定席があり広隆寺

鳥が翔つ花の開ける気配あり
気ふさぎの重たき花となりにけり
垂直に上枝に移る花の鳥
青き踏むよちよち歩きの子を従へ
連翹の目尻下りの花千万
桜には負けず気力の横溢す
ひんやりと手の甲に当て春の草
しやぼん玉速く流れて草の色
油断して朝比奈峠の落椿
ぼつぼつと桜花芽に降る雨も
二輪草雑草一つ交へずに
新緑の山となるまであと一息
油断して桜の花を見逃しぬ
花咲くと鳥もすつかりその気になり
嫁さんと姑さんと花仰ぐ
朱の射せる花と仁王の脇腹と
鈍器もて物を割る音花曇り
緋色の木瓜やうやく花を了りけり
けったいな花と蘇枋を見る勿れ
力づくの世に寸詰まり花きぶし
葛の蔓今ちよん切られをるところ
古りたるは吾のみならずペンペン草
雑草のつんと出ている芹の水
嘴のずんと重たき花曇り
ほつほつと花綻べど瘤樺
花咲くと寺の雀のかまびすし
雀鳴き囀すさくらの真っ盛り
日に栄へてべんがら色のさくらの枝
深々と物思ふべし八重桜
早々にさくらに來居る偵察隊
幹からして正真正銘山桜
花の句をすこし直して日曜日
念を押すごとくに春の雷鳴れり
花の夜を唄ひ上海帰りのリル
あたたかや庭の端より応ふこゑ
おのづから脚の弾める花の山
ものの芽どきその辺歩いてくるといふ
口よりも顔綻びぬ豆御飯
早朝を歩いて桜に足止めて

日向ぼこ頭の抽出より挿話
塀一つ向ふが墓地よ初桜
朝寝して打ち寄するごと心拍音
テレビ

ヒヤシンス女としての思ひ切り
薬取り違えて

薬剤師平謝りに平目の目
蹠のたわたわ花屑踏みつけに

祖光浄稔信士と余寒の掌になぞる

一卷の終りの花の水に散る

男気の筈の反りおのづから

花見酒まつたく止めたるにはあらず

雪の日の隣の魚屋早仕舞

目を遣りて黙って居れば花吹雪

酒量落つ話どうでも年忘

その昔の三田四国町鳥雲に

根っからの浜っ子野毛の桜見に

菩提寺へ向ふ足取り昼蛙

曇いわし嘗てはありし休肝日

悼 下田稔さん

旅先の汝がさきゆく花の中

停年の一年前の立泳ぎ

しだれたるさくらが見たく身延山

雛の日手にとりてみる本の帯

玉堂の昔の川の夏の音

兄弟子との旅のあれこれ朝寝して

一抹の淋しさ帯びぬ著莪の花

滝つ瀬の水の上に水跳ねまはり

独活の花無駄と思へば全て無駄

気の早き海辺の桜咲きにけり

海浜の雨は曲者花散らす

自画像は切羽詰まりし羽抜鳥

よそ見せず只句をつくる翁の忌

御法度の雑の匂つくる草城忌

玉霰今し方なる山降りて

糸瓜忌の喋りゐる句を皆捨てよ

御本尊どぜうひげもて仏生会

木の葉髪の八方美人で無類の妻

日の下に見栄捨てて咲く白牡丹

何事ぞ牡丹を寺の囲ひもの
黄の花粉まみれ大愚の牡丹とも
一生を棒にふりたるあめふらし
行き倒れ土竜不運な霜の朝
掌を出しぬ庭に移せしやぶれ傘
雪柳三千世界此処にあり

俳句仲間5人と久々に身延の花見と
洒落た。土地人の案内にて久遠寺域
の竹之坊へ投宿。早朝5時のお勤めは
不参加の不信心者ばかり。
翌日は林火先生の句碑のある内船寺へ。
句碑のまわりの別嬪桜にはワンカップを
もってご挨拶。花を堪能した。

祖師さまの山へのぼらん桜どき
花に逢ふ身延への旅共にして
ほとぼりのさめたる如く花の房
俳諧はらからへ
もう十年程ご一緒にさくらの世
花を詠む旅の続きはあの世にて
来年も又来ておくれ花の鳥
だらしなさ小児に同じ紫木蓮
名刹の名木桜に声もなし
川風にげんげゆらゆら大井線
川つ風まともに桜吹雪けり
いづくにて死に候とも墓を身延の沢にさせ
候べく候 日蓮

一わたり歩き身延の沢櫻
軽々と土筆頭を振る昼の風
大太鼓おどろ身延の朝桜
紅支垂匂ふといへばにほふなり
山櫻邪道といふ語口にして
南部町公民館の初桜
桐の木の四四十六の五月空
庫裡の戸に飛花打ち当り落ちにけり
杉林奥へ散り込む山ざくら
山桜揺るゝ処に目を遣りて
一転し向きを替へたる花の鳥
土筆打ちたたき出したる青煙
桜堤ぐるりと廻り込む川原
日に開けて皆空つぼの土筆の頭
紫荊おのれを通す色見たり
山の風大紅支垂揺さぶれり
風格を口々にいふ紅支垂

すずめのでつぼう東毎山の田を返す
花の私語葉の私語さくらさんざめく
久に晴る日和を云ふや花の鳥
桐の木の上で反転つばくらめ
緋桃咲き南アルプス昏めけり
花の風身延の山を揺り起し
朝の風支垂桜を揺り起し
早口に何伝へんと花の鳥
花の鳥南無南無南無南無身延山
桜堤点在させて大井川
夕づきてげんげゆらゆら南部町
花を押す南アルプスよりの風
花の鳥あれこれいふを聞き遣りぬ
花の鳥話し合ふこゑつまびらか
内船寺
花の下先師のおはち頭かな
山の風鳴れり土筆の頭上にて
葱坊主ああと鴉が日暮云ふ
土筆摘む音のつくづく真昼かな
山峡に川引き込んでつばくらめ
シーソーの花屑吹いて跨りぬ
山櫻訪ふものに風と鳥
ぶるぶると震へ止まざる飛花川へ
山風の音を溜め込む桜かな
青空へ一二三と飛花発ちて
山櫻望みつ昔話せり
大木の日影に入りてさくら見る
田に引ける水音すずめのでつぼうに
茶畑の上の茶畑燕来る
田の隅にぺんぺん草の丈を得て
甲高き鳥語に対す山櫻
クレソンの根方素通りせる水音
山吹の脇よりのぼる七面山
ぽんぽんと山桜置き遠山並み
身延晴れ空へ浮き立つ糸櫻
寿(いのちなが)身延詣での紅支垂
桐の上凝りかたまりて雲のいろ
お花見は身延がよろし頼みます
なほ上に目線を遣れば山櫻

花見客杖を忘れし身延線
接骨木の花に車両の蛇行音
緋の桃に近寄り過ぎぬ心拍音
富士川の鴨遡る河口かな
久遠寺の糸縊りかけて糸櫻
法燈の山櫻いろ夕づきぬ
夏は来ぬ焼津の海の魚(とと)光り
山吹のかたまり咲くや身延線
桃の花澁刺旅も久しぶり
紅支垂古木一花もつけぬ枝
花姿三島女郎のあでやかさ
急坂のなかの急坂落椿
雨脚の忽ち千筋花きぶし
胸つぶる急階段の落椿
仁王門柱へ手つき花の人
初燕身延の空を横滑り
杉の花日蓮上人草庵跡
かんばせに飛花の触れたる音幽か
老若の一切を度す花の風
本山の飛花つきあたる堂障子
涸谷を水鳴り墜つる山櫻
ふくよかに支垂櫻とひげ題目
上人の墓ある谷の花の風
むくむくと大善坊の毛虫かな
身延山一向(ひたすら)空を渡る飛花
音のして飛花うちあたる堂障子
飛花よぎりけり北之坊岸之坊
法の山さくら中段上段に
久遠寺の南無妙鶯ほうほけ経
本堂にずいと吹き込む花の風
祖師さまの山へ登れり花見衆
久遠寺の門徒ならねど桜狩
花は今ちるのみ西谷檀林跡
川原石の隙を見つけて花の塵
がやがやと身延で降りぬ紫木蓮
あっけなくトンネル抜けし桃の花
赤銅いろ芍薬萌へて大善坊
うぐひすのこゑの又せり坊隣り
接骨木の花まぎれんとしてゐたり

身延山花冷からかね灯笼に
岸之坊縁起立札落花浴び
れんぎょうの花葉にまぎれ込まんとす
白妙の昇竜となり糸櫻
杉の間の花の明るさ格別に
発電の太筒二本花の昼
山吹に一本調子車輛音
本堂の裏手高処の山櫻
登り詰め櫻吹雪の別天地

妻とのゴールデンウィークの二人旅は今回は秋山郷，飯山，柏原，小布施，鬼無里への3泊4日の旅であった。越後湯沢より津南，津南より秋山郷最奥に近い和山温泉へは鳥甲山，苗場山の雪嶺を臨みながらの芽吹きどきの絶景もつたいなくも二人で路線バス貸し切りの旅となった。和山でひとつ風呂浴びた後すこし戻ってかの北越雪譜の鈴木牧之投宿の小赤沢の宿に一泊。

翌日は津南へ出て飯山へ。臨濟禅中興の祖白隠禅師の師正受老人の正受庵へ。その他二三寺巡りしながら名曲「朧月夜」のゆかりの菜の花公園へ。柏原では一茶ゆかりの記念館などを見て廻り一路りんご花咲く小布施で一泊。北信五岳を一望の小布施温泉は予定外の景勝であった。翌朝はサイクリングで一茶蛙合戦見学の寺や北斎館高山鴻山館を見学，長野へ出て鬼無里の山里にて一泊。師大野林火の句碑のある大昌寺へは交通の便が悪く断念。奥裾花自然公園の雪中水芭蕉散策一本に絞った。

越後湯沢

襟立てて越後湯沢の木の芽どき

越後湯沢駅裏四五本新緑樹

一飛燕越後湯沢の川つぶち

秋山郷

日永さをふと思ひ立ち秋山行

熊狩りの秋山昔十五ヶ村

土筆生ひ瘡瘡ことさら恐る村

谷間の余花に差し込む雪解光

秋山行連翹一入眩しき日

残雪と越後訛りが耳元で

淋しさや土筆摘んでも摘んでもや
畑隅の雪間の桐のつくねんと

せり出して仙人沢の山櫻

かたくりの花に重たき山の露

土筆の丘おばさんハミングして通る

奥山のぜんまい色をして夕雲

谷間の何の木の芽か黄の強く

凡庸な芽吹きの色でありにけり

豪雪の爪跡芽木に残りけり

雪解どきさくら色なる芽木のいろ

谷川の水飛沫して五月空

朴芽吹き谷川の水段(きだ)為して

残されて鯨の背骨のごとき雪

小赤沢

湯壺より眺む暮春のきんと雲

秋山郷赤湯に春を惜しみけり

山櫻牧之投宿せし村に

田を植えて里俗の伝へ平家の裔

秋山に尋ね入りたるふきのたう

山間にエゾヤマザクラぽっかりと

小赤沢部落駆け抜け雪解水

奇樹怪岩峰の櫻を仰ぎ見て

秋山の田夫の妻が摘み来し芹

凶年の心得橡の実を食す

天然の貧地秋山郷芽吹き

苞破り橡の芽吹くや七曲り

つくしんぼちよつと通してくだしゅんせ

枯山の色に桜の彩を添え

分け入りて山の桜の淡きこと

山腹の桜綴りに秋山郷

谷間の一軒湯宿樺芽吹く

とろとろと芽吹きの色と春の滝

奥山のさくらは白く白づける

うるうると雪解明りに橡濡れ芽

ぜんまいに雪の峰々立て込みぬ

白っぽく日暮れ雪間のふきのたう

からまつのみどり為す溪温泉の湧ける

ふきのたう風に呆けて白面子

秋山もずんと奥まり朴芽吹き
白樺の芽吹き朝日に眩くごと
橡の芽のとり雪置く鳥甲山(とりかぶと)
山独活に東京者の舌づつみ
バス待てばやうやう来たりぬふきのたう
木の芽谿一つ物音徹しけり
ふきのたうの一団前山雪解せり
新緑や峨々たる磐にいろありて
出湯宿ヤマハンノキの芽吹くなか
和山温泉
この谿の芽吹くみどりも最たる木
朝寝してとろけさうなる出湯の里
わさび沢鳴る水に耳澄ませけり
そこかしこ水鳴り落つるわさび沢
肩頬に水の響けりわさび沢
雪嶺の白を貰ひてわさび咲く
猫柳苞を破れる溪の風
ふきのたう高むむかうに鳥甲山
むくむくと毛虫のやうなヤツ芽吹く
またの名を陸の明日葉鹿を見ず
しつとりとごみ掌にせる鳥甲山
ごみ摘む掌のひんやりと夕せまる
商ひに木鉢作りの木の芽宿
出湯熱く疲れをとりぬ木の芽宿
温泉疲れの躰伸ばせば昼蛙
春子入り山菜蕎麦をもてなさる
春子搔きわらびを干して山住い
雪嶺へずいと突き出す橡濡れ芽
山桜透いて朝日の差し込めり
わさび沢わさび養ふ水鳴れり
峠路の土筆呆けて立つ雪間
ふきのたうけふの泊りの一集落
雪解光谿の木五倍子を透きにけり
白樺の芽吹き促す風来たり
緩急の山の日差しに雪間草

津南 飯山線

合流して春の小川の音となる

聞けば是魚沼産米苗代田
春川の側まで行って耳立つる
春川の水の鳴りづめ渡し板
すもも咲くしなのしらとりたもとほる
長身の昔の種類花すもも
鬼くるみぼつり芽吹く千曲川
鬼胡桃雪の消えざる向ひ山
芹生ふる春の小川のきらめきに
メイストーム千曲川面を吹き窪め
タムシバの花も乾びて北信濃
りんごの飛花あれよあれよと千曲川
野焼せし川辺鳥の濡れ羽色
飯山菜の花公園

霍乱といふ語俄に照花菜
菜の花の明さ土地柄帯ぶ明さ
菜の花の丘に夕月かかる頃
菜の花の畑よこぎれる顔の翳
揚雲雀花菜明りの輪唱に
校庭に花菜の風の吹き入りぬ
はがゆさの花菜明りを見つめては
こそばゆし花菜明りに匂をしるす
つばくらめ雁木造りの町を飛ぶ
称念寺
目つぶしの若楓には苔応ふ
寺巡り櫻明りの道辿り
寺隣り又寺櫻明りせり
赤仁王飯綱山へ仁王立ち
くらがりより燕飛び出す仏壇店

正受庵

菜の花の只々明るく正受庵
昼蛙けくけく啼いて正受庵
そもさんと水芭蕉咲く正受庵
芽吹きそむ櫻二大樹正受庵
蒔きものを烏ほじくる正受庵
葉ざくらの葉ざくらのいろ正受庵

山吹や人は本来無一物

山吹の黄を突つ切りて正受庵
轉りの何處ぞと見上ぐ正受庵

蛙声裡正受老人栽松塔

正受老人の宗風然り青嵐

庭石にかがんぼ縋り正受庵

櫛若葉の懐へ風正受庵

正受庵かすむ山吹明りかな

柏原

菜の花の空ゆく雲も一茶風

一茶風花菜明りとおもひけり

菜の花の色も土地柄帯ぶ明さ

たねつけ花震ふ風出て一茶之地

そこはかと落葉にほへる一茶墓

すみれ草一茶の墓の裏も見て

柏原足で崩せる忘れ霜

春の蠅一挙手一投足の妙

春の蠅探せばをりぬ俳諧寺

一茶坊の生地たねつけ花の盛り

くらくらと花菜の中を歩きけり

柏原燕地を擦り飛び交ひぬ

一茶之地古草踏みて足は棒

松ぼくり前に後ろに一茶句碑

一茶句碑あちらこちらになづな道

一茶堂蠅虎が戸袋に

春の蠅何をするかと見てをりぬ

一茶之地燕いたぶる風出たり

白つめくさ風に揉まるゝ一茶乃地

乙鳥と一茶菩提寺迄の道

花菜の上野焼きのいろの広がれり

かがんぼの農道をゆく危かり

かがんぼを追い立てるにはあらねども

かがんぼのつかまる胸を貸しにけり

小布施

日の永く一つ目妖怪困碁打図
緑さす鴻山妖怪財布かな

春陰の陸続鴻山妖怪図

地中よりアスパラガスの顔出せり

サイクリングりんごの花の高さゆく

雀居てりんごの花と遊ぶ園

月くりくりりんごの花の薄闇に

碧い軒蜂の巣一つ落ちゐたり

北斎館

画狂老人北斎描きし白き蛇

画狂老人真筆雪中筍狩

つばくらめぶだう棚下潜り抜け

菜の花に北信五岳月夜かな

あっぱれなりんごの花の八分咲き

雪山に沿ふてりんごの花街道

岩松院

昼蛙腹の底より啼くが佳し

昼蛙うつらうつらと聞きをりぬ

鳳凰の八方睨み青嵐

昼蛙けくけく一茶ゆかりの地

蛙合戦前の浮草跋扈せり

蛙合戦見守る此処が上席ぞ

この池にずんとずぶとき蝌蚪の紐

鬼無里

西京

鬼無里村河鹿謡へり鬼女紅葉

蕎麦畑の触れなば崩る霜柱

はきはきと物言ふごとし山毛櫛芽吹き

鬼無里村西京の蓬摘みゐたり

この候の信濃大好き花くるみ

高山鴻山記念館

川音に鬼無里芽吹きの鬼くるみ
桐生ふは人棲む証青葉谿

谷水の蓬震はす音なりけり

川に挿頭すものの一つに花くるみ

谿に挿頭すものの無ければ山櫻

覗き込む真水の音の木の芽谿

雪嶺へ芽吹き足らざる鬼胡桃

こんもりと尾根を優しく山毛櫟若葉

とぐる捲き飯綱山の蝸蚪の紐

鬼無里村奥処たばこの苗を植う

南面は畑にとつて南瓜村

二三枚生ふは何の葉煙草とぞ

とろとろと紐垂れ見せて鬼くるみ

ぬくぬくと水の鬼無里の早苗束

鬼無里村大字鬼無里夕燕

代田水息せききって駆け込めり

早着きの宿に鬼無里の河鹿笛

花くるみ夕日大きく傾きぬ

つばくらめ鬼無里の空を折り畳み

芽からまつ鬼無里の風を送りけり

山吹のさきセキレイの水遊び

朝寝して鬼無里の鳥のこゑ間近

この上にもう一つ村濃山吹

からまつに一目惚れしてからまつ撮る

からまつの芽吹きを撮ると腰据えぬ

虎杖をへし折りゆけり鬼無里の子

戸隠山（とがくし）の裏手雪間の露のしゅ

うとめ

河鹿笛ほいほい呼べる谿に泊つ

戸隠山のうしろ正面ふきのたう

朴芽吹く磐がねのもと溪流釣

朝の川カワゲラ採りの来てゐたり

山間の二町歩分の早苗束

タムシバに朝日差し込む鬼無里村

田蛙のカララ躰に共鳴す

芽からまつ朝日に咽ぶばかりなり

水芭蕉

水芭蕉息整へて清流に

水芭蕉一目見んとて足ごしらへ

小流れに入り咲くもあり水芭蕉

水芭蕉の宝庫囲めり山毛櫟林

がしと雪踏みしめ見居る水芭蕉

林中の風も育む水芭蕉

ヤチダモの木の下アオモリガエルの池

雪底のクロサンショウウオの池は何處

水芭蕉乾きし泥を揉み落とす

水楢の古木隠りに水芭蕉

水芭蕉そこはゆつくり水流れ

雪中の山毛櫟に幽き木明るき木

からまつの淡さに次いで山毛櫟も佳し

山水に凱歌を挙ぐる水芭蕉

ふきのたう溪流音に育まれ

水芭蕉山水くびれ流れけり

二夕三搔き股ひろげ浮く山蛙

戸隠の奥山蛙高声に

雪明り貰ひて山毛櫟の樹肌とす

雪解風アズマイチゲにまともなり

遠巻きに道遠巻きに水芭蕉

山毛櫟の木の根元ほっこり春日差し

真昼間の山雪の上蜘蛛あるく

この奥に水芭蕉咲くサワグルミ

芽吹きそむ山毛櫟の英氣にあやかれと

重厚な山毛櫟の樹相も芽吹き前

芽吹きそむ山毛櫟の樹相の相似たる

水芭蕉林中に水響きけり

もう一つ顔乗り出しぬ水芭蕉

水底に倒木透けり水芭蕉

アズマイチゲ雪解明りを返しけり

科の木の根方に屯る水芭蕉

芽吹きそむからまつの枝の二十段

山毛櫟倒木頭部は雪に覆はれて

水芭蕉掠め山水蛇行して

雪中の山毛櫟の古木の遅芽吹き

水芭蕉見る向きがあり其へ向けり

からまつの芽吹き戸隠連峰見ゆ
ほれぼれとからまつ芽吹く山を見る
水芭蕉水面の光る処あり
水芭蕉水掬ひして親しめり
水芭蕉ブナ原生林の申し子の
オオルリのこの森深しといふごとし
せせらぎに木五倍子そろそろ花を垂れ
水芭蕉早く咲くぞと五十雀

その他

鈴懸の天へ向かってによきによき葉
ミドリ虫べん毛使ふこどもの日
仁丹の看板健在植田中
仁丹の看板代田水に映え

水上バスにて葛西臨海水族館へ

風の丘白つめくさのほひ占む

涼風に吹かれ始めの崎歩き

きよときよとアミメウマヅラハギ泳ぐ

ヒブダイの佳人とりわけ歯が見事

浮葉次々ひっくり返しゆく朝風

夏痩せてハダカイワシのご面相

ねずみもち垣の名残の花付けぬ

浴衣着の似合ふチョウウオオウゼン

びよんぴよんとタマカエルウオ蛙跳び

新緑に羽博ち強めぬ黒揚羽

オジサンのひげのうのと泳ぎけり

燕にしては小柄なあーんだ雀かな

クロマガゴの尾鰭ぎしぎし鳴るごとし

この槽（ふね）のウマヅラハギでござんす

よ

夏痩せて大海馬に向ひ合ふ

涼しさもその名からしてユカタハタ

ひょうきん者ねずみ泳ぎのネズミフグ

力泳のその名もウケグチイトウダイ

頭脳指数如何程メガネモチ瘤ウオ

白つめくさいちめん水上バス乗り場

昼顔の花の望みし薄曇り

中空へ油光りの藪からし

水上バス南風の東京湾突っ切り

ボンネットヘッドシャークの涼気過ぐ

翼打つ音のばっさり夏空より

目元涼しく「私カタクチイワシです」

フジツボの蔓脚おいでおいでせり

初夏初夏と浜の雀のかまびすし

原色のウメボシイソギンチャクに群れ

花かかぐ丈ほほえましハルジオン

鏑木清方美術館

鏑木清方風も描きて納涼図

経巡りて浮葉の間を亀の鼻

静物のうすら光りのコモリウオ

蟻きらりと泰山木の葉をあるく

鎌倉行妻は入念日焼け止

背鰭にて浮葉撥ね上げ池の主

竜宮の森を散策大海馬

タツノオトシゴ荒布の森を散策す

荒布の森散策リーフィシードラゴン

コンテナのプルシヤンブルー夏空に

船腹に夏の吃水線ありぬ

濱の先達 下田稔さんを偲ぶ会を膝元の

三浦半島剣崎にて開催。(一泊)

25名程参加して追悼す。中戸川朝人さん

参加 宮津昭彦さん追悼句投句。

稔さんの句に次句あればなり。

燈台の厚壁のぼる黒揚羽 稔

昔日

旅誘ふこゑ明るくて女貞花

馬鈴薯の花半島は曇り出す

風除けに女貞花垣燈台みち

道聞くも訝しがられ西瓜畑

フレームを解かれメロンの蔓走る

木苺の黄を透きぬたり海の風

波音に疲れが見えぬすいかづら

舟虫に危害加えることなんぞ

半島の風もみくちやに浜昼顔

山百合の蒼に朝の出舟の音

山百合の蒼幼く三つ程

舟虫の千の眼潜む岩陰に

じゃがいもの花に消えゆく磯の雨

燈台へ道なお遠し浜万年青

車前草の穂の長け出しぬ燈台みち

磯ものを採りに採ったり南風の中

磯ものとはバティラ クマノコ クボガイ

等の食用小貝のこと

揚げられて海シダ南風に蠢けり

刺し網に人手不漁をこぼすなり

ふなばたに南風の房州法螺貝（ぼうしゅう

ぼら）の山

タカノハ鯛大きく息す南風の中
刺し網にかかるがらくた蜘蛛人手
聞けば涼おのづから湧くウミウサギ
ウミウサギは真っ白な巻貝の一種
下手物とつまんで小鮫の首ねっこ
サンゴ色見事サンゴの寄生貝
コボレバケボリといふ名の寄生小貝
打ち上げられ荒布の根やら搗布の根
一目見てこの襜褕が若布の根
女貞花古風な匂ひつづく道
一つ礁日がな卯波の上る見ゆ
水無月にぬっと房州法螺貝（ぼうしゅうば
ら）の脚

行き交へる鯉に花屑日和かな
青虫の躰を揺すりつつ食事
潮吹の追いやるごとく捨てられて
一二段降りて見直す山櫻
花屑の転がるリズム口にして
鬱々の緑陰に吾が鬱を埋め
懷を風の素通し山櫻
下田兄
枇杷黄ばむほの明るさに百日忌
花屑に小旋毛風（こつむじ）立ちぬ愛宕山
走り根に花屑の風堰かれけり
花筏などとはとても云へぬもの

浜大根 一郎丸は朽ちにけり
ぬば玉の黒のクマノコつつけば梅雨
劍崎の岩場に手かけ木苺採
舟虫のほの朱き脚とどまれり
舟虫のおびえ心に岩を抱く
花南瓜 半島の道よく曲り
崎人の南瓜もどきの日焼け顔
舟虫幼な岩盤の色貰ひけり
舟虫の梁山泊を覗きけり
西瓜とメロンの摘果いづれが儲かるや
老舟虫 劍崎沖の黄昏に
たっぷりと梅雨の海見て眼鏡置く
半島の風に昼顔震えづめ
礁一つ卯波相打ち昏れにけり
半島に今蒔くものの無くて朱夏
夜叉五倍子の青実南風にごつつんこ
控えめな咲き方が佳し浜昼顔
胡瓜小さく南瓜大きく花点す

花屑の一団こんなところまで
かたびらの花覗き込む翳さしぬ
緑陰のまだらに息す生々と
真っ黒とおもひて返す齒朶葉裏
歳月とこれまたおもふ麦の秋
潮吹のほの明るさを掌にしたり
吹っ切れし如き明るさ潮吹に

ありがたや北海道の句友のおもてなしにより

常呂をはじめとする原生花園それも真つ盛りのさなかを訪れることが出来た。

水族館で日頃みていた狼魚が朝市の水槽に買い手を待っていたとは。これ食用とはトンと知らず。

旅はしてみるものである。
知床五湖のうちの三湖は罨が出るというので

散策禁止。代わりに熊ノ湯に入って気炎をあげた。

羅臼港に回ったが唄のとおり”遙か国後は……”

は海霧の中であつた。土産に斜里の大踏をいただく
いて湯がいてみたもののそんじょそこらじや柔ら

かくなるものじゃない。無理もないこいつは熊も
食うんだから。

シートベルトかちやりと締めて夏空へ

七夕竹搭乗手続カウンターに

夏旅の土産としたり荒磯石

灼けほてる土にどすんとランディング

七夕の空を渡らん軽装に

七夕の空を降り来て女満別

サロマ湖の空冷え来たり武者りんどう

波音のぺたぺた河原撫子に

エゾチドリ砕ける波に翔つごとし

泡吹虫梁へと向ふ道すがら

七夕の水平飛行に入る空路

えいおうと咲き出てエゾノヨロイグサ

武者りんどうこぞりこぞりて砂州に咲く
やたら咲き蝦夷猪独活やら蝦夷丹生やら
羅臼露声も大きく褒めたたふ

薄着して七夕の空渡らんと

エゾオオヤマハコベみひらく瞳の涼し

エゾニュウの茎に始まる夏百日

海蘭に夏浅き日の差し込みぬ

アマニュウと断ずるこえの自信なげ

エゾニュウアマニュウみんな似ていてどれ

がどれ

干草にひばりの声の冷えきりて

ぶるぶる機体震はせ夏野にランディング

アク強き露なり茎の色を見よ

七夕の空を飛ぶこと小一時間

素足もたのし浜弁慶草のほとり

素足となり踏んづけてみぬオカヒジキ

降り立ってさつと光の北海道

エゾニュウの段々オホーツクの平ら

竪穴の淵にししうど林立す

大入日大傘持の太茎に

エゾニュウの太茎隆と水平線

楡若葉みづうみ縹色湛へ

小振りなる蝦夷のまいまい露の葉に

海面はもう冷えきりて群れエゾニュウ

蝦夷黄菅うすうす入日差しにけり

オホーツクの風に蒿雀の声千切れ

あきらかに昨日咲く色透し百合

日差し未だ何処かひ弱く浜苦菜

一ト輝きありて夕焼けの水平線

オホーツク渚を滑りをる荒布

オホーツクすつかり夏めく草の色

牧の端に小振りも小振り蝦夷黄菅

湖の風が及びて蒿雀啼く

透し百合今朝咲く色と教はりぬ

エゾニュウのここぞと咲ける白さかな

エゾフウロ岬吹く風に泣くごとし

大傘持に吹き付けオホーツクの風

大傘持どすんと海の風を受け

エゾニュウの咲く頃よかると来て常呂

オホーツクに薄き日差しや浜苦菜
青鷺がここにもオホーツク晴天
エゾニュウの茎の吹き折れ青岬
ご当地の赤蝦夷蟬といふを聴く
着いて直ぐ赤蝦夷蟬を耳にしぬ
武者りんどう湖尻の風の冷えて来ぬ
ばさと割る毛蟹の背中夏近し
味噌汁に布海苔を浮べ荒磯宿
蟹を食ふ素手いそがしやいそがしや
はまなすのここがよかると腰据えぬ
青鷺の子つ子（こっこ）に翔べと湖の風
半日陰好みて咲ける蝦夷風露
エゾニュウの花移ろへる房のいろ
はつなつの光返しぬ蜩殻
大方は夏着の機内見渡しぬ
はまなすの波寄る方にはびこりぬ
浜豌豆太つちよ豆を孕みそむ
オニシモツケ緑陰の風昏めけり
光輪タンポポ羅臼への道ひた走る
さう云へば蝦夷萱草を見ない年
這杜松（ハイネズ）を越えて海猫海へ出ぬ
蝦夷育ちこのまいまいを見よといふ
砂地には素足がよろしシロヨモギ
突き刺さる弘法麦に斜里岳見ゆる
ドロの木の前は洩れいる夏日差し
聞き返す花の名何と武者りんどう
咲きに咲く蝦夷透し百合去年の倍
北辺の日の未だ高く浜苦菜
オホーツク風いでだんまり縞菖雀
浜苦菜ほろりと風に動く砂
浜昼顔仕舞ひ忘れし花二三
エゾニュウの茎の吹き折れ強日差し
エゾニュウの吹き折れ夏の日が注ぐ
エゾニュウのつんつん咲ける岬巡り
目に滲みる白さえぞにゆう点ず岬
岬鼻に日がなエゾニュウ吹かれづめ
湖尻に夕日見送り蝦夷黄菅
蝦夷萱草一つこつきり海荒るる
はまなすの風やり過ぐす咲き方も

鉄路の辺蝦夷萱草の終の花
半日陰好める花もお花畑
蝦夷河原撫子入れて砂州の窪
岬巡りおしまい浜昼顔も閉ぢ
色合ひもそこそこ樺太人参咲く
地味で通す黒花半鐘蔓の花
七夕の空港ロビーで落ち合へり
エゾニュウのポンポン咲ける岬巡り
葉面にカムイの貌のはえとりぐも
オホーツクの波けむり浴み浜防風
海鶉らのいよいよ黒く荒磯岩
夏草のウナギツカミといふを引く
エゾニュウに次々立ちぬ兎波
青鷺のふうわりはまなす吹かる方
また現れて忘れた頃に蝦夷風露
エゾニュウの高低を吹く風のあり
エゾニュウの高きも低きも吹かれづめ
一段と入日見事や透し百合
北辺の夕日に首のべ車百合
蝦夷丹生の花了へし房了へぬ房
大蔭に海鳥の糞羅臼晴る
青鷺のゆつくり越へぬ楡若葉
押し照るはビット畑か夏の航
降り立ちて蝦夷大葉子の飛行場
エゾニュウの花房撫でて岬巡り
機内涼し頁繰る風及びけり
草ロール生れて日陰作りけり
羅臼港夕づく燕飛び初めて
青鷺の向き向きに明けわたる朝
置物のごとく青鷺置く干潟
とりとめなき風の吹くなり浜昼顔
羅臼町海霧の岩山背に負ふて
青鷺の振る首白く光りけり
海霧籠めの国後島に目を凝らし
海霧最中背黒鷗の行方見て
青鷺の羽を開きて朝迎ふ
やにはに海霧国後島を呑み込めり
羅臼町海猫は女ごえを曳き曳きて
出没の熊で持ちきり若葉宿

やみくもに海霧出て羅白岳巻けり
しろしろと海霧に目覚めぬ鋸草
熊ノ湯に入るも一興若葉どき
熊ノ湯に熊出る話若葉どき
蛇のあと今度は何が湖畔みち
たちまちにハイマツ帯に海霧至る
浜防風咲く辺の小石拾ひけり
すいと現れ滝見の尾白鷺ならず
はまなすも目つむる砂州の砂つかぜ
日焼せし腕のひりひりウトロの湯
俳句莫迦冥利に尽きる夏の旅
つつつと羅白岳の肩に海霧流れ
オホーツクブルーに夏の海無辺
これより夏砂州を舞台の花宴
はまなすを吹いてテラスに及ぶ風
はまなすに空気小流れつくりけり
古巢箱老鷺を目で追ひやれば
寝冷腹抱へて槽（ふね）のおおかみうお
尾も曲げて昼寝三昧おおかみうお
おおかみうお黒の羅（うすもの）はおりけり
揚雲雀海風に声張りにけり
はまなすの実を染めオホーツクの風
滝音のかすかに聞ゆつるあぢさい
鳥好きのやにはコゲラを指させる
夕焼けなほ光の帯の水平線
夕焼けの終の光の水平線
羅白岳燕もろともかき暮れし
岩燕壯ん羅白の町暮るる
馬鈴薯の花を震ひに風又風
かしゃかしゃと番屋近くに鳴く虫も
朝のうち斜里岳見えて薯の花
大露の広葉打つ雨聞かまほし
熊ノ湯の湯元ここなり露の中
露叢の中の露天湯のぼせけり
鮭梁のあたりうろつく熊ならず
光苔見ゆると云へばそれとなく
ウコン空木海霧を抜け出てひよこ色
流木と別の白さのシロヨモギ

露叢の真中を鮭の遡る川
弘法芝弘法麦の族（やから）にて
素足になる浜弁慶草のほとり
足許を吹く風のあり蝦夷風露
棒立ちの大傘持に沖時化て
這杜松（ハイネズ）に海猫の声行き交へり
それなりの見方がありぬ光苔
云はるるまま目線を移しエゾセンニユウ
あめんぼに雨がばらつき大はしやぎ
馬鈴薯の花曇日を好みけり
あめんぼの波を越えゆく脚達者
茎の色確かにエゾノヨロイグサ
海鷗らに船より流る流行唄
遊覧船続々帰投燕らも
牧の馬二手に分れ蝦夷黄菅
竜骨を晒す廃船蝦夷薊
青胡桃腕拱いて見ていたり
水際に蕾を立てて浜昼顔
素足で踏む砂の感触弘法麦
シロヨモギ素足になれといふごとし
黄菅色フオッグランプに海霧抜けて
湧く海霧に前後塞がれ峠茶屋
馬鈴薯の花ゆらゆらと丘越えぬ
沖時化てじゃがたらいもの花騒ぐ
海霧籠めの灯を点しけり羅白町
岩つばめ巢穴の見ゆる空を翔ぶ
風の日はことさら高く岩つばめ
羅白沖背黒鷗に海霧去来
国後島あとかたもなく海霧の中
魔がさしたやうに海霧湧きまだ引かず
羅白岳育ちの河原露きよら
ときに鹿現るる林道海霧塞ぎ
樺の上海霧を抜け出し山容
一鳥も一船も見ずうみほおづき
水槽のホタテでんぐり返り夏
海霧育ち羅白育ちの大虎杖
丘伝ひ風回り込む薯の花
国後島しりへにだんまり海猫の翔ぶ
えぞかわらなでしこ砂州の凹みにも

青鷺のあほむく朝の空があり
またたびの脇を滝水引き落つる
光降る中はまなすの花と棘
またたびの花の彼方の海風げる
斜里町はサーモン色の夕焼けに
大姥百合土器出づ森の緑陰に
大姥百合木下閣より窺へり
ドロの木の間蝉剥がしやりにけり
縄文土器復元作業薄暑裡に
エゾタンポポ幾つも堅穴住居跡
森若葉してセンニユウの高調子
樺皮葺きチセあり若葉明りせり
空蟬にセンニユウの声徹りけり
蝦夷大葉子青空に花穂さし入れて
ハマナスに別名あれば
テラスのさき露のジャパニーズ・ローズか
な
アイスクリームとうもろこしの味したり
鉄路伸ぶ限り群落ゼンテイカ
エゾニユウの先廃船と流木と
涼しさをみずみずしさをオカヒジキ
青鷺の嘴を預けし砂州の天
夏の露まみれに砂州のオカヒジキ
流木に閑閑の日々浜昼顔
先ずは目にしてエゾスカシユリ群落
ようこそとハマナス園の客迎ふ
馬鈴薯の花うつすらと斜里岳浮び
青鷺の向く方オホーツクの夏
擦文の村跡柏若葉して
一輪の影の揺れづめ浜苦菜
白樺の走り根も亦いと涼し
岩窪に見え隠れして海猫子っ子
女満別空港
北キツネ色に点れり誘導灯
日差し早や夕日に近き麦畑
蛭蓆午から変る山日差
岩礁の海鷗一列大落輝
河骨にもつとも近づくと夫婦もの
蝦夷鹿のきよとんとせるに出逢ひけり

水馬日陰好みと知られけり
蛇を見て暫く話蛇のこと
蜻蛉の昇天羅臼岳正面
残雪の引つ掻き傷めく羅臼岳
滝水の段なしオホーツクに入る
斜里岳のけふはうっすら花はしどい
枯れ蔓に小雀懸垂したりけり
北きつね現れ目線合ひにけり
花園の黄菅は終り波の音
湖も牧の持ち物蝦夷大葉子
逃水の直路ビートの照り返し
えぐられし赤土巖棲息地
糸とんぼ停止お次は何処へゆく
葉先へと瑠璃糸とんぼ距離を詰め
糸とんぼ止まる所が判りけり
巢離れとおぼしき海猫の声を曳き
気に入りし草がありけり糸とんぼ
生ビール内地の人よと云はれ酌む
青鷺にオホーツク海冷たかる
北辺の風波打ちて麦畑
裸麦風を透きくる強日差し
風の道幾つも生れぬ麦畑
薯の花咲く畑一目千町歩
丘又丘じゃがたらいもの花旺ん
露刈のいかつき茎を束ね呉れ
露刈かごそつかせいる秋田露
露刈の大露叢の中移る
旅人に斜里の大露刈り呉れぬ
山の落なればしっかりアク抜けと
草刈って斜里町の夏始まれり
北辺の日を余すなくハマナスに
横からも顔を突き出し滝見かな
魚棲ませシマフクロウの森作り
羽田
宝石函ぶちまけしごと夜涼の灯
武者りんどう屯北辺砂州の丘
大傘持オホーツク紺極めけり
空きありて集り足らぬ蛭蓆
太陽の三時の色の麦畑

エゾセンニウウ双眼鏡の間に合はず
鬼やんま反転羅臼岳左方
日は真上麦のツートンカラーかな
この丘の麦のツートンカラーかな
椴松の根方にひよっこり銀龍草
鮭梁の水透くばかり大虎杖
滝音に太肉体軀打たせをり
鎌持ってずいと入りたる露叢に
虎杖生ふ遠音別川鮭遡らず
畳なはる大落罷棲息地
滝音の呪縛振り切り来たりけり
遠郭公朝の散歩はここらまで
洗面の水ほとぼしり遠郭公
糸とんぼ声を掛く間に見失ひ
熊出没海霧の峠のあの辺り
白樺の緑陰てふはよかりけり
夏浅くおおかみうおの息継ぎて
朝市涼し買ひ手のつかぬおおかみうお
滴る山眼下に納め尾白鷺
草原に八月の翳尾白鷺
滝つ瀬に声張りにけり漢ども
日焼顔熊除けの鈴借りゆけり
飛瀑音花またたびに上りけり
大落に轟くオシンコシンの滝
透し百合日は中天を回りけり
よく見ゆる羅臼岳の残雪湖巡り
はまなすの一花一花に褒め言葉
河骨のくりくり蓄水を出て
羅臼岳正面残雪二三箇所
海猫のわいわい云うて巢立ちけり
岩燕北海の空高めけり
深呼吸二つ三つしぬ麦の丘
一岩礁海鷗もろともかき暮れぬ
朝市のおおかみうおとにらめっこ
岩燕の巢穴にやっと目がゆきぬ
つるあぢさい知床の森深めけり
巢作りや大岩棚に華と海猫
だんまりの海鷗にオホーツク暮るる
双眼鏡に拾へりウトロの海猫子っ子

蜻蛉のふらつと現れて沼近し
尾白鷺大岩壁の背後より
昼深く大麦畑白光す
重ねあるリュックサクや登山口
はまなすの砂丘にのぼり風受けぬ
たてがみの如く夏草靡く牧
大滝の水量を云ふ在の人
なほ耳に残る滝音を旅土産
麦畑継ぎ目なく風送るなり
黄菅縫ひ花園散策ガイド嬢
大旋風（つむじ）生まるることも麦畑
麦畑吹き渡りくる風の綾
林道は未だ続きけり北キツネ
押し迫る青嶺や罷棲息地
逃水や斜里岳とろけ出しにけり
蝦夷土産羅臼の露を湯がきけり
カンゾウのまだまだ咲いて鉋網線
露採って内地の人をもてなせり
雲海や右翼を染むる大落輝
河骨の真上に羅臼岳画架を据う
河骨を日焼けいとはず見ていたり
遠郭公うたたねの耳開きけり
エゾニウウに似てアマニウウといふがあり

原宿族灼けほてる路往き来せり
原宿は灼けほてる街夾竹桃
夏木立風を呼び込むカフェラス

髑髏圖も弱冷房裡国芳展

脳天の先まで冷ゆる骸骨圖

国芳の肉筆美人門涼み

蝦蟇・一つ目舌切雀圖葛籠（つづら）より

幕末絵師国芳ひろく怪奇の涼

国芳のおどろ絵前にへばる夏

国芳の骸骨戯れ絵に涼む人

振りかざすだんびら涼し怪猫圖

鬚涼しゅう芳年描く国芳圖

暑にかすむ神経衰弱芳年筆

坂田怪童丸

丸裸怪童丸は鯉抱く圖

海中に躍れる武者の赤ふどし

相馬の古内裏

骸骨圖解剖学的精度もて

讃岐院けん属をして為朝をすくふ図

鰐鮫のゾクと涼しや摺師の妙

閻魔王どでんと絵本合邦辻

川中島合戦図

夏霧に勘介入道討死圖

涼ゾクと勘介囲む槍襖

箱王丸

大願成就有_レ滝縞唄着こなし

野晒悟助

正札付現金男を指す扇子

優男髑髏模様の浴衣着に

夏夜に闘ふ烏天狗と牛若丸（うしわか）と
花魁の団扇絵あふげばさぞ涼し

源頼朝富士牧狩之図

岳麓を駈け下る猪牧狩圖

文覚の頭（かしら）を打てる那智の滝

物の怪の涼乗り移る国芳展

波間より知盛亡霊現れ晩夏

曲亭翁精著八犬士随一図

犬川莊介犬山道節見え切る涼

水滸伝豪傑百八人図

水門破り張順刺せる刺青（タトウ）の涼

国芳の血糊手形圖汗ばめる

宇治常任

夏木立締め上ぐ大蛇侠客圖

川中島真田昌幸

夜涼の川引き据え昌幸初陣圖

鼠除け猫圖靈驗あらたかなり

八畳敷掲げて狸夕立避く

八畳敷ひろげ狸の川狩り圖

大蛇（おろち）めく松の太枝の羽衣圖

晩涼の黒々すずめ仮宿圖

夜涼の灯すずめのおいらん遊郭圖

とび・つばくろ芝居尽しの見立絵図

東都名所かすみが関の正月圖

昌平坂正月富士の晴れ姿

流行逢都絵希代稀物

大津絵の鬼らも正月都絵に

大名行列白狐にたぶらかされる圖

提灯持ちは狐大名行列圖

富士講衆汗して高輪大木戸圖

役者絵 尾上菊五郎

おお涼しやほおかぶり怪猫圖

としよりのよふな若い人だ

人体にて顔合成圖冷酒（ひや）を酌む

五条橋

ほうづき尽し絵牛若丸も欄干も

天狗の修行者

涼しげに天狗の行脚入浴圖

不忍池行断念

炎熱に打たれて蓮見どころでなし

日盛りの鎌倉の何處がよかろうかと
 いうことになって、今は百日紅の盛り
 故いざ極楽寺ということになった。
 妻が海を見たいというので江ノ電の
 鎌倉高校前で下車、そのまま駅に
 居残って大波立つ相模灘を一望した。
 目前ではサーフィン。安くて涼しくて。
 これ来年も又やろう。

百日紅盛りなりいざ極楽寺

青天に百日紅の灼け蒼

にいにい蟬尻をびくびくして鳴けり

百日紅萬の蕾の数珠光り

灰燼に帰すものばかり百日紅

百日紅通り抜けゆく風のあり

門前に虫喰い芙蓉極楽寺

百日紅真正面に腰据えぬ

ほうほうの体にて戻る鰻の日

差し込める光の見ゆる百日紅

なかんづく清濁の清百日紅

心身を抜け通るいろ百日紅

廃れたる律の教学百日紅

百日紅かんかん照りの中詣づ

芙蓉咲き初め毘盧遮那佛(びるしやなぶつ)

佛前

戻り道のらりくらりと鰻の日

灼け青む蓮の葉叢の胎蔵界

段葛ふいに翳して黒揚羽

丑の日の元気な妻と出歩けり

蜻蛉の背後よりして紙の音

鰻の日中食のあと寝そべりて

風起ちて蓮の葉ひっくり返しゆく

呉派 陳淳に荷花図巻あれば

蓮葉は陳淳の青湛えたり

きささげの葉陰伝ひに土用東風

土用鰻年寄然として食うぶ

土用浪一つ大きく勇魚いる

土用浪うねりそこねるものあらず

疾走に続く疾走三角帆
 相模灘一望土用浪の反り

句友

足許の不如意こぼしつ真炎天

浮輪抱え江ノ電に乗り込む子ら

だんびらをかざせるごとく土用浪

江ノ電にみるみる寄せぬ土用浪

海濱の空気澄みをり実珊瑚に

海めくれ出して生まるる土用浪

暗緑に七里ヶ浜の土用浪

夏帽子など気休めの強日差

炎帝のたぶらかさんと睡魔の手

枝空いてやり庭隅の夏木立

干梅にけふの日当り二十粒

瞬きをするさへ惜しや揚花火

逃げる蟬枝に幹に頭を打ちつけて

炎帝に先手打たれて日照り畑

立ち姿立派ならざる峰雲も

炎帝にお小言貰ひ田草引き

さうばたばた暴れなさんな油蟬

風に怯む蟬音聞きつゝ夕餉とる

チリと鳴き庭木の蟬のあとひっそり

くそ暑き日ばかり続く炎花

けふの青空秋すつ飛んで来るやうな

運河あり橋あり花火大会あり

炎天の雀の一举手一投足

家人来て暑さ凌ぎに何かやいふ

旧軽井沢を振り出し真夏の旅

この暑気にころりとまいる木槿かな

避暑といふ乙なものをばいたしたく

鶏頭の色づきを待つ母の日々

昼深くぎくりしやくりと鳴く蟬も

炎帝の語気も白雨の雨脚も

のし歩く夢中の鬼をうる覚え

雄螢の求愛の労報はるる

歯音涼しう美食家のモモズメ

目を大事にするといふ人草の花

百日紅手術病ひを引きつけて
蟬ごゑの夕づく風に尻つぼみ
心臓のポンプ健在冷房裡
心臓の葉欠かさず夏休み
趣も楽想風に文字摺草

葭の風舳（みよし）に軽く触れゆけり

曲げられぬそこを何とか冷し酒

日盛りにフェラガモの靴おろしたて

銀幕の上がるがごとく揚花火

揺るぎなく会心の出来雲の峰

寂寞と昼の扇風機と裸身

峰雲の会心の出来諸畑

大傘持岬一番の剛の者

能取岬エゾニューの白づくし

避暑の留守二十日鼠をあづかりぬ

吾に向く扇風機あり昼寢覚

哭と啼き羅臼の空を夏鷗

一睡後山椒魚のごとく居る

かぶりつく玉蜀黍に齒の試練

通勤路蟬音聞かずを独りごつ

じれんまに陥る時の蟬音とも

逝く人は逝き車前草の伸び盛り

落し物御難続きの夏となる

蟬の伴奏ラヂオ体操せる子らに

梧桐に風起つ街の並木道

液体のごとくじはつと朝の蟬

夏空が救ひのやうにある日なり

新秋と隣り合はせにけふの空

地下鉄の構内冷房斑があり

今日も亦「函の会社」に冷房漬け

辿り着いて冷房完備「会社の函」

冷房裡会議堂々巡りして

冷房車快適朝刊ひろぐ御仁

冷房の函を連ねて出勤車

古書街の炎天をゆく胡乱な目

街鴉にどのビルも灼けほてりをり

夕風の裏返りつゝ蟬しぐれ

メヒシバは引きオヒシバは引っこ抜く

大甲板やんぬるかなの白雨来て

広額の汗晶々と古参海女
秋風と自分に言ひ聞かせるように
頁繰る如く晩夏の裏返り
返礼に中華饅頭暑を凌げ
昨日より暑くなるぞと朝の蟬
禁煙・弱冷房車輛殖ゆる世ぞ

母も八十三歳。遠出もそろそろ限界。
ということので子供三人連れで避暑と
いふ響きのよい旅をした。
軽井沢に二泊。高峯温泉に一泊。
帰りがけ佐久に廻って鯉料理など
も堪能した。

ししうどに浅間山の峯雲隆々と
峰雲の白も格別薄雪草
坂がかかる小諸の町の夏燕
夏樗藤村記念館覆ひ
古城趾の城垣に沿ひ川の風
実向日葵虚子上り下りせし坂か
虚子庵の石の隙間の滑齒笥
日傘さし虚子庵までの坂上る
涼みをれば千曲川風もう一つ
小諸城趾川風のくる涼み台
裾野なる火山灰地に枝豆伸ぶ
灼け蔓のぐんと伸びたる浅間山
杖置いて千曲川の風に浸りをり
高原の風ほしいまま薄雪草
繡線菊の小諸市街地見下ろせり
千曲川灼けに灼けたる青くるみ
谷地渡る風に白シャツはためかせ
日盛りの虚子庵囲む柵垣
レタス畑縦横縦に徹る涼
夏の露避け寝袋とオートバイ
信州の日差し青田と枝豆に
蕾む百合こづいて籠ノ登（かごと）山の
風
祭り季の信州に来てたいまつ花
今灼けて三畳半の縁側は
虚子庵に足掛け四年すべりひゆ
虚子庵の沓脱ぎ石に白靴を
句碑 人々に更に紫苑に名残あり
庭石に紫苑を配す旧虚子庵

湿原を振返り見る吾亦紅
虚子庵の二隅占めて小梅生る
虚子庵に青梅こぞりこぞるかな
一茎の吊鐘人參描き取る
吾亦紅ミロの構図を想ひをり
風の中松虫草は蝶集め
松虫草花のフリルの靡きづめ
薄雪草風ひやひやと渡りけり
からまつの走り根を発ち高山蝶
くりくりの坊主頭の吾亦紅
夏帽子かぶり直せばきりぎりす
風向きの絶えず変れり松虫草
野薊を吹きたくなりぬ谷地の風
野薊のこの端正な身のこなし
吾亦紅湿原の風計りをり
横顔に湿原の風昼寝せり
吾亦紅シツクな臍脂点しけり
かわらなでしこ湿原巡る女ごゑ
風混める大谷地が見え松虫草
木道に人影を見ず松虫草
槍の穂を繰り出す前の槍鶏頭
高原の風の染まれりレタス苗
甌穴（おうけつ）に川の朝涼躍りけり
佐久平稲の穂先に結ぶ露
刈草に白つめ草も交りけり
大待宵草如何なる宵を迎えけむ
夏川の水音しみしみ聞きゐたり
露まみれ蜻蛉河原の草叢より
刈草の色を離るる青蛙
青蛙刈草むらを潜りけり
刈草を跳ねて豆粒青蛙
川風のぶつかる岩場山女釣
山女釣けふの釣果をこぼしけり
溝萩の花のほんのり朝日差す
虎杖の葉に穴つぽこ豆金亀虫
大姥百合山雨に聞き耳立てにけり
地ビールもうまくステーキ平らげり
白雨のごとログコテツジのバーベキュー

大姥百合朝に一雨ありにけり
バイケイソウ広葉に降りし露の数
ベランダの木椅子に聞ける閑古鳥
コテッジに目覚めて森の遠郭公
くつろげと籐椅子ありぬペイネ館
高原の朝の蛾が来て大玻璃戸
ブレックファースト籐のワゴンにパン盛り
て
牛乳に軽井沢風コッペパン
石窯焼きコッペに高原野菜添え
ウイットの涼味もトリックアート展
避暑の宿壁紙は茶とアイボリー
藤寝椅子アールデコ調ロビーにて
ブルーベリー二粒氷菓のトッピング
避暑山荘テラスに設ふバーベキュー
カンバスに避暑地の風も書き込み
郭公聞くネイビーブルーのペンションに
佐久平その端っこの青りんご

レモンドペイネ美術館
粗書きに日陰ペイネのリトグラフ
避暑客で賑はふ三ツ星レストラン
ふんだんに高原野菜のバーベキュー
孟蘭盆会高原花豆咲き乱れ
鬼百合の蒼深反り山冷ゆる
高原の蛾の舞ひ発てる朝涼し
霧抜けて青き太陽松虫草
のあざみのぬくもりのある茎の線
谷地渡る風筋のあり松虫草
軽々と一步踏み出す森林浴
籠ノ登（かごと）のあれといふ間に霧襖
レトロ調避暑宿選び泊りけり
ジープなど勢揃いせり避暑の宿
だまなして霧の走れりゼンテイカ
霧冷えの肩に落ちくる樅雫
虎杖の花見直せりお花畑
避暑便りペイネのポストカードかな
霧の海肩から冷ゆる峠越え

昇りくる霧脚の見ゆ黄菅原
避暑季の軽井沢銀座歩きけり
風筋に花委ね咲く松虫草
照りつける佐久に立寄り洗鯉
風通り鯉の洗膾を待つ座敷
八方より霧湧く黄菅原に入る
下り道キスゲに湧ける霧八方
バイケイソウわずん霧の深くなる
日光キスゲ霧におぼるる呱呱のこゑ
シュロ草の見栄えせぬ花霧込めに
九階草霧淡くなり淡くなり
霧の随（まにま）に日光キスゲの幽明界
気まぐれな霧の合間のお花畑
吾亦紅霧は濃淡強めけり
霧浴びし山の蜻蛉の羽根使ひ
霧込めの黄菅明るさ増しにけり
お花畑霧の中くる足音あり
吊鐘人参聞きをり霧の私語（ささめ）ごと
霧のこゑならぬ人声薄雪草
霧冷えの肌につのれる薄雪草
霧淡く又濃くアキノキリンソウ
地表より朝の蛾発てるお花畑
のあざみの優しさに手を触れにけり
霧のこゑキオンてふ名を持てる草
霧を出てヤマブキシヨウマ霧に入る
蜻蛉さんここに止まれと吾亦紅
霧来ると小首振りけり風露草
白咲きの天下一品駒草ぞ
淡きこと繡線菊に及ぶまじ
繡線菊の淡き尽して咲きにけり
バイケイソウ背後に霧の廻りけり
駒草や小石を濡らし霧湧けり
蜻蛉の朝の羽音とすれ違ふ
蝉の穴程の寂しさなどといふ
寂しさは蝉の穴より優りけり
シャワー浴ぶロッヂ黄昏募りけり
ハイカラな日傘見かけぬ軽井沢
宣教師銅像覆ひ令法咲く
大姥百合林間に風通りけり

吊鐘人參雨はいつしか上りをり
ポタージュの匂ひに蜂来カフェテラス
軽井沢土産絵葉書草の花
教会の網戸の窓を風抜け来
教会の木椅子より見え椽の花
風通るテラスにてピザ避暑家族
白雨来て水晶光りの枝雫
軽鴨のお尻を立てて漁りをり
軽鴨の雨やりすごす凧とも見え
しみ・ほくろ透ける湯にゐて夏逝かす
赤つめ草高原を風渡るなり
おおぞらの一方展け白雨来
枝々の明るさ増せり白雨中
白雨避けログコテツジの珈琲店
灼け青む稲田を渡る風のあり
蜻蛉のぶんと発つなり露河原
パン盛りて鳥の形の籐籠に
庭草に避暑地の夕風起りけり
ロツヂ泊り婆ちゃんと蚊と妹と
部屋の名に鳥の名並べ避暑山荘
木漏れ日に大姥百合の薄光り
道しるべなど打ち避暑地の雨気まま
ログコテツジほたるぶくろに迎えられ
軽鳧の子も一人前に水脈を曳き
避暑地風ブライダルコスチューム店あり

軽井沢銀座

避暑客に掲ぐ看板神戸牛

真夏夜の知らぬが仏不整脈
 蟪蛄のごとく腕を置く寝相
 居士大姉精霊舟に乗り給ふ
 泣き寝入りすると細る虫の音も
 ピンボケのバックがよろし弁慶草
 八月十日は心の日
 ペイネの鳩夏空を戀ふハートの日
 震災忌云い聞かす婆無(の)うなりて
 土埃立てねばゆけぬ稲穂道
 死す蟬のあほむく天と地動説
 白芙蓉天動説の昔かな
 昼餉俱にして夏瘦の弟よ
 絵タイル道ペイネの恋の落葉どき
 建て替へる前の我が家の松葉牡丹
 出勤の途上にて見し秋をいふ
 見通せる質屋の路地の白粉花
 その話これで何度目瓜の種
 布袋草見てゐる妻のふくらはぎ
 金魚玉風抜け易き家が佳し
 夏霞メガロポリスといふ言葉
 夏枯れのここに一樹のプラタナス
 真昼間の暦どうかういふ寝言
 きちきちの桂馬跳びする天赦日
 里の日に睦む蝗の鬼宿日
 暑苦しさうなる人の群れ離れ
 向き合ふてハトといふ虫秋日和
 また一つ蟬仰天の出勤路
 火取り蛾の翅の目ん玉闇見据え
 夕立に肝透くおもひ榊大樹
 高架駅ちんちろこんなどころ迄
 秋津島颯風窺う頃となり
 布袋草きゅつとくびれるところかな
 揚主は秋田の紅屋煙火店
 花火果て闇抱え込む雄物川
 つむる眼に現るる花火のあれとこれ
 さくらの木ここを最後と蟬啼く木
 白粉花の仕舞ひ忘れし花五六
 のうぜんの置いてきぼりの花日暮れ

産土や夜蟬を零す木もあらむ
 さくらの木幹赤茶けて蟬死す木
 蟬むくろ転げさくらの木の根方
 葉鶏頭林立の季(とき)迎へけり
 おののけるヤマトシジミを手にしたり
 蜘蛛の囀の縦横糸に結ぶ露
 ずぶ濡れの空蟬一つ見つけけり
 蟹のいふ事情とやらを聞きやらむ
 啼き放題手前勝手な蟬音なり
 通勤のホームに扇子あふぎ族
 国芳の一幅欲しや円朝忌
 一呼吸二呼吸して水くらげ
 椀となりお皿となりて水くらげ
 水くらげフリル上手に使ひけり
 こちら向き海月の四つ目小僧かな
 お岩さん海月のごとく手を垂れて
 海月見る時間たつぷりありにけり
 水くらげ包容力といふ言葉
 大きく息継げる海月を見做へり
 水くらげショーマンシツプ發揮せり
 水くらげ水の塊吐き出せり
 くらげ文様六文銭に相似たり
 かまきりの貴公子現るる草の隙
 禁煙のいつしか破れ夏の果
 男郎花籠ノ登山(かごと)水ノ登山(み
 ずのと)肩並べ
 もつと短く芋殻を折れと妻の云ふ
 紙丸め芋殻を折りて火掛く番
 おがら火を挟み話の続き聞く
 京劇に呑み込まれをり日の盛り
 もう一組蟬捕り姉妹現れぬ
 蟬捕りの一組づゝの宮巡り
 鶏頭の頭の埃払ふ雨
 木から手を離してしまふ油蟬
 晩涼の黒の勝ちたるぶちの猫
 割り込んでここぞと鳴ける蟬のあり
 夕蟬にやうやう見ゆる鳴き疲れ
 油蟬力んで命減らすなよ
 じり貧といふ啼き方をせる蟬も

夜間飛行機花火の傘の中を航（ゆ）く
花火割れねずみ走りの火玉かな
揚花火ソ連崩壊せしことも
花火の傘爛れかつをのえぼしかな
炭酸のはじけるやうに閉ず花火
昼寝覚まだ去りやらぬ如来肌
年々に澄み勝る白百日紅
大胡瓜冬瓜風に味付けす
どうこれと頬つぺた落っこちさうな桃
扇風機に似てくる骨だらけの裸身
終戦日合掌の刻迎へけり
疎開地の諸の畑の終戦日
河童らに呼び掛く水泳予備体操
古歳時記腸めくを索く晩夏
あめんぼの飛ばし過ぎなり乗り上げぬ
刀豆の天麩羅といふごつきもの
昼からは頭も霞む夏期講座
がりがりと妻が自家製氷水
木更津上空灼け煌めける機体あり
先生のぜんそく八月句会果つ
大型絵本覗き込む子の瞳の涼し
煙のごと伸びて縮んで水くらげ
普段着の水母の単衣よかりけり

1999年 甲子園夏

熱帯夜手話にて告ぐる開幕戦
峯雲も一喜一憂甲子園
モンスタ―生まるる夏の甲子園
炎天下左腕と右腕対決す
風死す中バントこつんと決まりけり
背に受けて三りんぼうの日の西日
三振を喫す唇鹹き夏
日盛りの中軸打線火を噴きぬ
もくもくと投げるエースにあきつ殖ゆ
赤とんぼ沖繩尚学敗退す
快音も一直線に夏青空
飛球となり夏大空を馳すおもひ
素振りにも見ゆる片鱗打者日焼

常夏の島で鍛えしサウスポー
アンパイヤー掠れこゑ挙ぐ油照り
雀斑の日焼せる顔大写し
甲子園グランドを馳す大夕立
油照り三者凡退とは何だ
レフトへ犠打詰まったしまった汗引く顔
力投の汗のエースに勝負憑く
大西日差し込む中の延長戦
日焼せし腕ものいふホームラン
汗っかき太っちょ監督サイン出す
かつとばせ嬢天下の國の打者
甲子園合掌の時迎へけり
炎天を味方につけぬ勝投手
力投に強打力走日の盛
猛暑裡に下す審判疑へり
決勝の壁と峯雲峙てり
戦う汗涙となりぬ夕栄に
夕焼雲負けえーてくやしいはないちもんめ
夏惜しむバックホームの残像も

薄念仏会

時宗総本山 藤沢山（とうだくさん）

清浄光寺（遊行寺）

遊行寺のすすき光沢持ち始む

薄は穂に清浄光佛在す寺

薄念仏唱ふや鏡縁（きょうえん）澄むほとり

鏡縁は時宗固有の内陣の板の間で極楽の池を

象徴的にあらわす

薄念仏誦す僧蓮華座布団に

白張提灯点しこれより庭踊

藤沢山日鑑

其の上は庭踊てふ念仏会

お上人手ずから賦算（ふさん）念仏会

賦算はお札くばりのこと

お札には「南無阿弥陀仏決定六十万人」

艶ありて甕の薄も念仏も

穂薄に踊躍（ゆやく）念仏立ちのぼる

白芙蓉如如（によによ）常住のほとけなり

花すすき十方（じゅっぼう）衆生の願ありて

藤沢山（とうたぐさん）野ぶだうに色のり

初めぬ

八朔の雨吹きかけぬ一遍像

秋雨に一遍の肩濡れそぼち

薄念仏唄ふがごとく若御坊

薄念仏磬（けい）打ち鳴らし打ち鳴らし

大頭（つむり）ゆらりと薄念仏会

足もじもじ薄念仏なほ続く

ねんぶつ会薄のいろの堂畳

堂上に薄念仏待つ男女（なんによ）

足わろき上人さんの庭踊

薄の辺念仏踊りの足運び

花すすき揺るゝがごとくおねんぶつ

敬老日雨具携え念仏会

佛心も穂を解く薄もつややかに

念仏と薄と踊る一遍と

秋の声踊躍（ゆやく）念仏立ちのぼり

上人の虫音のごときおねんぶつ

遊行寺坂坂上葛のひるがへり

御坊らの磬（けい）打ち鳴らし庭踊

月岡芳年 月百姿展

水面の月檜の寶藏院覗く

清経の笛高らかに舵楼の月

仲麻呂のまなざし凜と月の海

鎌倉

切通し七つの一つ葛嵐

颱風が来るぞ来るぞと多摩川梨

近くの芝神明宮でだらだら祭り（生姜祭り）

があるというのでここ二三日 会社の昼休み

を利

用して吟行と洒落て出かけていったら

社務所の横の壁にこんな文句があった。

昨日といひ今日と暮らしてあすか川

流れて早き月日なりけり

春道

列樹

うなづきながら 階段をおりてくると表札

があ

つてこんどはこうだ

まけたまけたその柏手の生姜市 其角

そして社務所でもらった神社由来を覗いた

ら

生姜買うてさざめきゆくや芝芸者 庚子

そういえばここはめ組のお膝元 みな粹だ

ねえ

大門は目と鼻のさき生姜市
かはたれの芝に廻りて生姜市
薑（はじかみ）のにはふ夕暮市をゆく
購へる生姜小股の切れ上がる
懐に風を入れつゝ生姜市

江戸時代芝神明宮のあつた増上寺界限
は生姜畑。広重の絵に残る。

其の上の生姜畑の芝秋暑

ご常連購うて絵馬付新生姜

かはたれを其角ぶらつく生姜市

芝神明大祭神拝詞（となえことば）添え

生姜市汗ぬぐえどもぬぐえども

いちげんの客とし覗く生姜市

だからだと汗ほとばしる市なりけり

街路沿ひ一抹の涼針槐

神明生姜みんなはけよと祭笛

薑の香曳き市中抜けにけり

生姜売る巫女の袴も生姜いる

市の灯に神明生姜紅潮す

ご利益もの生姜作りを禰宜指図

葉を落とし神明生姜作りかな

買うてゆけ神明生姜とめ組絵馬

ご縁起もの生姜作りの男衆

瀬谷 徳善寺 萩を見る会

住職の萩を活けんと枝選ぶ

けふの花活けんと萩の枝選び

じつくりと秋海棠に坐り込む

白芙蓉見ながら体調どうと問ふ

白萩のはつはつ咲けるご本堂

多羅葉の片陰に入り一ト安堵

多羅葉の一幹見上げ白緋

ひとりびとり萩に佇む寺まひる

蝶止まるごとくに萩に佇める

小径より小径分かれて萩の寺

無常迅速生死事大と萩咲けり

多羅葉の青き実善根積めとこそ

白萩の小径よぎりて走り咲

多羅葉の葉陰がよくて終の蟬

柱巻金龍蟬を涼しく聞く

柱巻はお寺の本尊の両脇の柱に巻く

飾りの幕

萩叢も萩見る会も旺んにて

白萩の波うてる空蝶翔べり

知己に逢ふごときやすけさ萩を見る

白萩の楚々たるを寄せ掃き給ふ

道おもい出しながらゆく萩の寺

初萩のほとばしる白搔き分けて

初萩に呼び止めらるる氣のしたり

白萩のけぶるが如くその蒼

ご法話のその先急ぐ蚊遣香

白萩の花屑吊れる蜘蛛の糸

誰が墓所ぞメヒシバ五本丈を得ぬ

烏瓜何ちふ花のしほれやう

鋭さを内に押さえつ青すすき

白萩に女のこゑのよく徹る

萩を押し寺の小径の始まれり

秋草の名挙ぐ三人三様よ

塀越しに見る花大犬蓼の花

へぼ筋の句ばかり出来ぬ糸瓜棚

萩白く身心脱落せよと云ふ

萩の花掴みそこねし虻見たり

吾といふ心消滅萩の花

下葉より下葉へ零れ萩花屑

蝶となり翔びたちさうな萩の花

萩の花身心脱落説くごとし

おいど乗せ寄進座布団蟬を聞く

大風をまとも正直葉げいとう

ひりりと来鯖の味噌煮の針生姜

月なかまでお向いさんの芙蓉咲く

信玄はここを渡りぬ荻に風
丈を得しかまつかの辺を母巡る
萩咲くと聞くさへ過ぎし易き日々
大風の中かまつかの伸び盛り
一段と空深くなり葉げいとう
天上より風かまつかを一ト煽り
覚めぎはに一つ伸びせり保己一忌
産土に昔気質の夏櫛
海鞘食うて酔はざるごとく酔ふごとく
読みかけの書に目を通す秋の雨
目覚めよき耳許に来る秋の雨
蝉鳴かなくなりし庭木の梢みる

高峰温泉 拾遺

駒草を嘶かす霧出でにけり
駒草の鼻先掠め霧湧けり
吾亦紅霧が閉しにかかりけり
松虫草霧来る方を知れるなり
繡線花うすぼんやりと咲けるなり
天上に峯雲地上に薄雪草
籠ノ登山と水ノ登山踏まえ雲聳てり
紅輪花晚涼の風起ちにけり

朝蝉に耳をおほへり軒雀
朝顔の大輪清水湛ふごと
苦瓜にまだまだ蒸す日続くなり
きちきちの羽音も凌ぎやすき日々
秋草に跳ね翔ぶものの我が足下
通院日またぞろ扇子持ち出して
秋分の草叢に日の強くさす
きちきちと云うてバツタをまた翔たす
闇底であゝと夜蝉の啼き納め
秋蝉のネジきりきりと巻くごとし
風船かづらぼんやりと日を過ぎしけり
白粉花の皆黙秘権使ふごと
青柿に葬りの寺の灯の漏るる
跳びそこね頭より落つこちバツタの子
女貞青実灼けつく日々は了り

静岡へ二泊。

第一日目は宇津ノ谷 許六句碑の慶龍寺を
散策 吐月峯で観月会
第二日目は梅ヶ島温泉途次の油山 平野で
十六夜の月を堪能 焼津港へ廻ってその足
で友の再婚の宴に出席
帰れば長子に女子誕生 もうお爺ちゃんだ

宇津ノ谷

雨脚の吹き曲り見ゆ野分山
沢蟹の銚いの字に怒るらし
沢蟹のつぶらなる目に朝が来ぬ
沢蟹の子の歩む先靴で堰き
沢蟹の子の雨水に手足透け
いっばしに鉄振り上げ蟹の子ら
長雨に降り籠められし鶏頭花
宇津ノ谷の山の雨吸ひ栗の毬
宇津ノ谷の連ぬ屋号に秋の風
宇津ノ谷の葛も了りの峠道
宇津ノ谷の蜻蛉寄り来る寄らしめぬ
雨宿りせる軒先の槍鶏頭
宇津ノ谷の葎叩きの雨上る
だんだんと見えてくるなり棚の郁子
赤のままその他知れる草二三
小蔓とて油断召さるな葛の蔓
宇津ノ谷の沢蟹に遭ふ登り道
沢蟹の小雨まみれの一二匹
現れて小雨まみれの沢の蟹
颱風にやられずるべつたり蔓
宇津ノ谷の雲行き怪し山ぶだう
山芋の茎は一旦下降して
宇津ノ谷の雨の山路を蟹よぎる
宇津ノ谷の秋の大雨に佇めり
花すすき宇津ノ谷集落見下ろしに
屋号もて挨拶交はず瓢越し

宇津山 慶龍寺

十団子の碑面伝ひ秋の雨
秋雨にまみるる森川許六の碑
秋雨のやみて又ふる宇津ノ谷路
虫聞いて峠にありし地蔵尊
ここに許六宇津ノ谷の秋吟じけり
ここに許六秋風の吟残しけり
大榎を訪ふ蟬もなくなりし
十団子に南天の実の青きこと
十団子の白さに萩の花吹かれ
青柿の尻辺に雨滴まはりけり
種零すばかりに婆の朝顔棚
十団子の白さ秋の風吹けり
十団子の碑（いしぶみ）秋の風招（よ）べ
り
十団子の白さに文字も許六の碑
十団子も許六の碑文字もいや白く
えのころに雨粒当り弾かれぬ
萩吹かれ十団子の碑に散りかかり
秋霰雨つたの細道烟らせて
秋霖に降り籠められぬ丸子宿
無月なら上々けふの里の空
雨月なら雨月のなりに句を為さん
無月また雨月もよろし吐月峯
宇津ノ谷の秋霖軒を借りにけり
野分川滔々安倍川餅のいろ
待月軒なればの月の句を成せと
旅先の鞠子の宿の野分雨
愚図つき気味ながらも月見のけふのそら
秋霖を衝いて弥次喜多二人旅
吾は弥次汝は喜多露の宇津ノ谷路
旅先の雨脚見つゝとろろ汁
彼岸花ひよろりと宇津ノ谷峠口
数珠玉の葉に玉に雨跳ね継げる
川端の数珠玉を打ち映の雨
宿外れ一本咲きの彼岸花
雲助の如き雲脚野分山
お羽織屋幽きたたきに昼の虫
親方のこゑの飛び来る秋日和

萩なぶる風十団子の碑へ抜けり
沢蟹のどこと宇津ノ谷地蔵盆
紫蘇の葉を打つ雨たまさか花も打つ
鶏頭のひとりガンバリをる日暮
川に沿ふ道ゆるやかに糸すすき
貧乏と云う他なくて蓼の花
貧乏を色もていへば赤のまま
お粗末な色の雨濡れ赤のまま
穂すすきに山の一方明るうなる
花すすき人家といふは寄り添ふて
鶏頭のこれが親方これが弟子
鶏頭の暮るる暮るといへば暮れ
天帝の如雨露秋霖とぞ云ふて

吐月峯 待月軒 柴屋寺
観月会
茶会 聞香 薩摩琵琶

台風下
吐月峯とんだ雨月となりにけり
月の出は嵯峨より貰ふ竹の上
観月会三々五々と客引きぬ
観月会戻りの道の轡虫
天柱山がちやがちやの闇深まれり
前山にてれつくてんと月昇る
天柱山小闇転じて望の月
観月会お香談義にユエの伽羅
お月見の一隅占めぬ堂座布団
お月見の寺の座布団十あまり
琵琶弾じ香聞き合うて月見衆
雨上り天柱山は月得たり
雨名月程よき数に客ありて
末席へ雨名月の遅れ客
お月見のお諸おいしく頂きぬ
すすめられ雨名月の座につきぬ
雨名月天柱山は闇向ふ
先師また雨名月の句を成せり
立ち寄りて待月軒の芋名月
蜻蛉の訝しげなる眼に遭ひぬ

蜻蛉の極めて人間臭き季（とき）
太郎坊はた次郎坊滝不動
穂芒のまさに段平抜かんとす
隠坊の如きとんぼが前から来る
伸びをして躰ほぐしぬ鴟の宿
望月のいろを貰へり女郎蜘蛛
野の萩と数珠玉を活け観月会
秋明菊新月のいろ湛へけり
法隆寺古材香合月見の茶
月見の芒経て本堂に通る風
風颯と雨月いよいよ確かなり
月見んと望月いろの堂畳
月待ちて望月いろの畳の上
月見の座望月いろの堂畳
堂柱五本月の出待たれけり
大寺の二間打ち抜き観月会
月の軸一幅かかげ月見の座
大寺の二間打ち抜き薩摩琵琶
白木槿けふの良夜を約束す
庭前に山水引きて月見寺
寺門脇楨の高垣月の寺
庭前の紫苑に月の待たれけり
数珠玉に新月の色載りにけり
雨やみてくわりん月夜となりにけり
淹るる茶も望月いろに月今宵
観月の一座弾みて伽羅談義
薩摩琵琶待月軒に徹りけり
薩摩琵琶雨月無念と弾じけり
月の寺二間に徹る薩摩琵琶
雨月なり撥のぴたりと薩摩琵琶
薩摩琵琶雨月湿りの撥捌き
重衡を弾ず無月の薩摩琵琶
よき数に月見の席のお座布団
梅ヶ島温泉途次 油山
葛黄葉始まる遊山の道すがら
水の秋一級河川大曲り
安倍川の堤の風に猫じゃらし

川筋の経巡る秋の大河原

草の葉に尻をすばませ青蛙

この辺り倒れながらも泡立草

おはぐろの影おはぐろを追ひゆきぬ

おはぐろにおはぐろの影ありやなし

おはぐろの影を何処に忘れ来し

考えの閃く如くおはぐろ現る

浮草に数では負けぬ早稲垂穂

雑草のぴよんと手抜き稲田中

鶏頭の黙って思案せよといふ

おぞましき蜻蛉群れに群れたるは

蜻蛉のうようよ凶の翅使ふ

蜻蛉群る最中に入るを避けにけり

糸揺すりやればどう出る女郎蜘蛛

蜻蛉の群るは何處かいかかわし

蜻蛉の疎んぜらるるも人に蹤く

攪乱を起して倒る稲あらん

かんかんと日の照るさかり稲稔る

梅ヶ島温泉途次 平野 泊り

民宿の茶請けの栗の渋皮煮

ごきげんよう朝の畑の新牛蒡

里人の里芋作りこの家も

洗ひ場の底にうごめく大蚯蚓

村中の高みを鶏頭生ふる道

明け方の十六夜の月沈む嶺

秋燕を見たりのこゑに振り向ける

秋燕と振り向きざまに声発す

落栗の真新しきはこれとこれ

里芋にこの村の土合うとみえ

茶畑をしりへ露の村の家

茶作りに大事も大事山の露

枝豆の葉の蒼深し山の畑

四鮎上りの店にて購へり

茶畑のその畝々の朝の虫

峡の日のやうやう差しぬお茶の花

やぶめうが峡の朝露しとど浴び

店先に月見名残の花すすき

一鳥を翔たせて峡の空澄めり

諸畑を越え来る朝の鶏のこゑ

峡人の川原を拓き諸畑

おろぬきの五六畝食の足しとせり

四鮎漁期も了り近くなり

山雀の鳥籠が見ゆ稲田越し

四鮎赤旗掲げひさぐ店

芋の葉の風にやられてばらりずん

畑仕事一区切り付け鴉を聞く

初鴉に耳をあずけて寝法楽

くわりんの実なりし秋光集むるは

彼岸花蒼ばかりのお仏壇

秋出水一夜に削げる川原石

こわいもの知らずの山の栗の毬

百日草百日咲いて村荒ぶ

紫蘇の実をしごきて夕餉支度かな

直ぐなるは朴の木と知れ秋の空

川波の緩急つけて芒過ぐ

草木の雨滴払ひて良夜明け

くさぐさに望の夜明けの川音す

十六夜の月移ろへば窓替へて

十六夜の月を堪能して寝落つ

十六夜の嶺連なれる峡に泊つ

十六夜の二間貫ひて山の宿

二人旅寝物語りの十六夜

十六夜の小腹に納む里の栗

十六夜の宿の枕を均しけり

十六夜の栗と眼鏡のつるのいろ

十六夜の宿の障子を走らする

虫の宿敷居は斯くも磨り減りし

かたはれの何時しか寝落つ虫の宿

槍鶏頭一族郎党引き連れて

糸芒真似て雌日芝穂を解ける

里芋の茎の色よき十六夜

畑のもの茗荷など出て宿夕餉

栗の毬有無を言はさずひんむかれ

茶の花に片づけ始む野良仕事

ごろた石集めて茄子の垣とせり

鶏頭の小火出す火の見櫓下

山峡は大きな虫籠床に就く
飾り箕に栗の二粒夕の膳
十六夜の月見こちらの窓がよし
山峡の百千の蟲夜を徹し
真葛ヶ原芒ヶ原の河原みち
川原に葛の虜の合歡若木
彼岸花雨後の水量増せる川
稔田を一望にせる鎮守なり
むささびの飛び交ふ森はあれと指す
初鵬に嶺々の稜線締るなり
山鳥のこゑの弾める良夜明け
川音のすいすい抜ける芒叢
穂すすきを育む朝の川の音
薄原たそがれ白き川原石
芒とる少年月を迎ふ村
一叢のざつくばらんな糸芒
里芋の畑の廻りのごろた石
花のいろ芒に一步譲る葎
川上の又川下の花芒
活けるには程よき芒半開き
節々に臍脂の入る川芒
川波のこゑを懸けゆく糸芒
川は生きて水勢増せる芒どき
見較べて手首ほどある芋の莖
里芋のよべの嵐を切り抜けし
諸の付く頃を猪よく知れり
初咲きの鬱金の花を佛花とす
川越えて諸畑荒しの猪出たぞ
そこそこに鬱金作りの畑仕事
利口者猪にまたやられけり
川波と堤を奔る彼岸花
稲田とる中あり峡のこの辺り
川筋の乱るに乱る野分川
犬蓼のだんだら下り村の辻
初鵬に宿の家族も朝餉とる
目覚めたる上をよぎるは朝鵬か
向ひ山峡の日を浴ぶ栗林
日雀鳴きつるうめもどき色増せり
葉生姜にびしびし峡の雨到る

雨風を凌ぎし芋の身丈程
峡人の自給自足の芋畑

焼津港

金目漁針繕ひの秋日和

漁師曰く

金目漁さうさな八丈島（はちじょう）辺り
まで

日曜日舟虫奔る焼津港

船籍は気仙沼とよ鮪船

初孫

のむしやぶる爽やか赤ちゃんあくびする

10月前半は

長谷 御霊神社（鎌倉権五郎神社）の面掛行列

光則寺 日朗の土牢／国慶節 双十節（ゼザン）又展

／お会式 池上本門寺／大英博物館 古代エジプト展
をざあっと廻った。

長谷

御霊神社（鎌倉権五郎神社）の面掛行列

面掛行列は「仮面風流」を今に伝える文化遺産

鎌倉権五郎景政の命日に当たる例大祭は神輿渡御

に面掛衆が行列するので知られる

面に十面あり 「爺」「鬼」「異形」「鼻長」「烏天狗」「翁」「火吹男」「福祿」「阿亀」「女」なり

江ノ電を跨ぎ出立面掛衆

面掛衆のほとりをうろうろす

面掛行列ひようと天狗の先被い

神輿渡御（おわたり）を待つ間「鼻長」一服す

面掛の「福祿」頭巾持て余し外人

「鼻長」をわし鼻が見る面掛祭
面掛の天狗の高下駄のっしのし

「女」（とりあげ）が孕み「阿亀」（おかめ）に団扇風

面掛けの面のざらつく秋日和

面掛けのお面に負けぬ立見衆

鎌倉に裏面史ありぬはらみつと

はらみつとは。。。。。

「面掛衆のうち、おかめは妊婦の風態に仮装し、大きな腹を抱えながら歩行する。それゆえ、この行列をくはらみつと」と称したこともある。田楽によく出るはらみ女の流系と見たのであるが、里伝によると、源頼朝が甘縄の非人の娘を懐胎させたので、年に一度、彼らに無礼講の機会を与えた、その名残といい、近年までく非人面行列とも呼んでいた。現在の名称は最近、採用したもので『新編相模国風土記稿』八幡祭礼の条の“仮面を掛ける者十人”によった。

「（永田衡吉著 「かながわの祭と芸能」）

先被い天狗ぐらつくこともあり

をさな子の鎌倉囃子に乗り「翁」

にこにこ来る鎌倉ぶりの「翁」面

路地も狭に面掛衆と立見衆

面掛けの一戸一役里祭

面掛けの出を待つ「爺」（じい）と梶の瘤

立見衆凹み出っ張り面掛祭

光則寺 日朗の土牢

玉すだれなかなか夏が逝かぬなり

酔芙蓉とつぷり酔ひが廻りけり

腕組みしてさてどう詠まん弁慶草

佛心のいろ例ふれば実むらさき

これからの萩と荅を指させる

山茶花に毛虫一騒動ありぬ

秋めくや土牢脇の竹箒

灸花いつまで続くこんなこと

雄日芝のすれっからしのその穂先

蝸牛渦のぐるぐる颱風裡

白粉花侏儒の喇叭を吹きにけり

腕つぶし強き矢倉の蚊にささる

袈裟いろの葛打ち敷ける土牢前

性きつき椰に秋冷到りけり

住職のお手植えにおいばんまつり

結納の薄日和となりにけり

土牢へ葛の花屑踏みしめつ

錦木の実の色づくも遠慮がち

卒塔婆を押し頂ける鴟の昼

日朗の土牢近く鴟のこゑ

鎌倉に土牢三つ秋立てり

秋風の抜けてくるなり梔の洞

権五郎神社の秋の梔の瘤

蜻蛉の目配り岩の稜（かど）掘み

長谷観音

永き日のわれらが為めの観世音 虚子

岩煙草いささか黄葉したりけり

観光客

スタンディングブツダといふも露けしや

拝観路鴟聞くごとくフランス語

鴟に似てフランス人のフランス語

国慶節 双十節

国旗又飯店の赤国慶節

龍舞の秋空を馳す金ん頭

龍舞の銅鑼のじゃんじゃん空澄める

目をぱちくり耳をぴくりと戯け獅子

龍舞の黄龍秋日総身に

龍舞の龍頭に深く澄める天

龍舞の秋風曳きて龍の髭

赤毛獅子秋日まみれに玉乗りす

龍舞の汗だくとなり尻尾役

ご祝儀を口にて受けぬ赤毛獅子

饅頭に押す紅しかと国慶節

双十節祝いの獅子の浮かれ足

中華獅子おどけ瞬きしたりけり

じゃんじゃらじゃん双十節の獅子現れぬ

龍淵に潜むや双十節式典

関帝廟脇にて双十節式典

双十節足取り軽く獅子現れぬ

悟空てふ店にて求む雲南茶

青龍の胴空を切る双十節

少年の長剣の舞双十節

双十節式典最中秋烈日

玉乗りの獅子に秋日まるまると

肉包（にくまん）をほおばり歩く秋日中

豆沙包（あんまん）の湯気透けるなり秋日

差

大珍楼萬珍楼の春灯

龍舞のくねり始めぬ秋天下

獅子頭双十節の高空に

獅子舞の獅子目覚めたるところより

龍舞の龍ぞ色なき風に乗る

舞獅子のまぶたぱちくり秋麗ら

ご祝儀に頭をひよこと赤毛獅子

横濱中華学院

渡り鳥見上ぐる國父記念校

セザンヌ展

セザンヌの7つのりんご影曳けり

セザンヌの好物ジャガイモサラダの秋

セザンヌの林檎等胸を張るごとし

皿に盛るリンゴ崩れるところを画く

西洋梨ごろんと一つ静物画

とりすます陶器のポット秋日差

セザンヌのアトリエ籠にりんご盛り

笛の音のやうな名前のピサロの絵

セザンヌの裸体習作秋半ば

緑陰に裸婦三人の水浴図

木を画いて草木のごとく澄む心

赤土と草木と何とか山の秋

水浴図木々のみどりを浴ぶごとし

静物のリンゴと皿とビスケット

卓上の白布にリンゴ爽気立つ

セザンヌのリンゴの秋となりけり

夜の長し「カード遊びをする人」に

若描きの髑髏と燭台秋深む

お会式 池上本門寺

末寺の庭に万灯出を待てり
提灯を掲げ万灯迎へけり
万灯の打ち鎮まるを遠目より
万灯の灯いろのすいと進むとき
万灯曳く先頭床屋の親爺に似
万灯曳く色とりどりの法被衆
万灯に提灯持の追いつかれ
万灯は心のときめき色にして
万灯のほとりに息を鎮めをり
万灯の連なり点る本門寺
帰るさの万灯の背を見送れり
本門寺さまへの道聞く日蓮忌
万灯に一塊りの人添ひ来
万灯の灯いろ胎内明りとも
幡・纏・提灯見えて万灯来
大太鼓ずんとずんと御命講
ここより坂会式太鼓の息合はず
高張りに皆婦妙法御命講
お会式の太鼓に婆の膝拍子
川風に押され万灯橋わたる
ご本堂揺るがす会式太鼓かな
本門寺さまへ万灯百連ね
現山寺会式太鼓の押し昇る
万灯のいま鎮もれる風受けて
団扇太鼓鼓膜を震ふ御命講
入れ替り会式太鼓を打ち据えぬ
万灯の人肌いろの灯が見え来
万灯につかまり立ちのご長老
二番手の万灯坂を上りくる
万灯の身を透く明り手に当てて
万灯の後ろ姿のもう遙か
どろどろと団扇太鼓の日蓮忌
鼓膜さぞ分厚き会式太鼓の衆
戻りてもお会式太鼓耳の底
へたる腰お会式太鼓打ち抜いて
万灯の三つ連なり到着す
お会式の団扇太鼓に浮足立つ
呆け顔会式太鼓を打ち抜いて

辻に立てばお会式太鼓四方より
帰るさの会式太鼓をうち担ぎ
会式太鼓聞ゆる町の辻に立つ
万灯の心に点る戻り道
万灯が次から次と数珠繋ぎ
大英博物館 古代エジプト展
上野駅出て直ぐ共同募金のこゑ
上野の山人出の秋となりにけり
赤い羽根つけて上野の森に入る
平日の上野の山にふる落葉
爽やかな出で立ち何處か画伯風
アメンエムハト三世
大王の石像頭部露けしや
石像の頭部露けきエジプト展
太陽神ラーとミイラと昼鳴く虫
石像のテーベ市長と遭ふ一間
ミイラ露けし包帯に護符差し挟み
霊力の甲冑よろふ露ミイラ
死者の書は畏れおおきと紙虫云うも
虫音のごと木乃伊の音声ガイド洩れ
身に沁みてナイルの青の石像護符
露けかり木乃伊の棺の審判図
露の日の木乃伊の頭蓋亜麻布詰め
木乃伊巻く亜麻布の綾露けかり
秋半ば木乃伊作りのアビヌス神
秋口の鰻のミイラとご対面
猫のミイラ犬のミイラと露けかり
冥界へ発てる木乃伊に狒狒の護符
死者の書を観て出づ色なき風の中
一室に木乃伊六体そぞろ寒
シャブティの目を瞪ける豊の秋
シャブティは死者が来世で農耕をする際
肩代わりするもの
パピルス紙紙虫の類がつかぬかと
大神官石像露けき手を胸に
露けさのここに極まるカノポス壺
カノポス壺はミイラにする際に

肺胃などの臓器取り去って入れる壺
金秋の木乃伊に履かす足覆い

運動会町内の空響かせて

空伝ひ町内運動会のこと

長咲きの花汚れをり玉すだれ

美術展観 黄表紙 べったら市
産土八幡さま 端山散策 テレビ放映吟
(瀧 長崎くんち) がこの度の吟行内容

美術の秋

エレベーターガール長身モードの秋

秋は何より青邨の人物画

「奔流」

玉堂の岩兀々と水の秋

大観の絵の仙人につのる霧

川上澄生

浜っ子の澄生のガス燈火の恋し

美術の秋なじみのレジエ キリコさん

黄表紙

眉唾もの黄表紙ひろぐ秋燈下

黄表紙のうがち欠けたる世とくしやみ

「模聞雅話(ももんがわ)」鬼の角切りうそ寒し

「芋太郎屁日記咄」読初めに

燈火親し「臍の下谷」を読み始む

秋はひねもす「鼻峯高慢男」読む

秋夜読む「扱化狐通人(さてもばけたりきつねつうじん)」

「他不知思染井(ひとしらずおもいそめい)」に深む秋

秋来るといふ目を鹿のしたりけり

高みより家人を呼べる松手入れ

高齢者社会到来豆柿に

起き抜けの首のあたりのそぞろ寒

林檎割りことしの密の多寡云へり

木犀の花屑二三歩程に尽き

鰯はねる視野を大きくとりにけり

踊る身をあびせ倒して鰯墜ちぬ

水面の彼方破りて次の鰯

鰯跳ぶと云へる側からまた跳べる

フィニッシュを見事に決めて鰯の反り

鰯はもう跳ばなくなりぬやおら寒
二日程早めと鶴の飛来報

大画面鶴の飛来を大写真し

カーテンの鈎付け長夜の植木算

赤ん坊をあづかる秋の空のもと

赤ん坊を又覗き込む柿日和

赤ん坊の顔も整い秋うらら

薄目せる赤ん坊に秋みえるらし

蒸かし諸今日も一日籠りゐて

誘ひなく何處へも行かず石露日和

干蒲団けはしくなりぬ鴟のこゑ

曼珠沙華次々生ふる土恋し

べったら市

べったら市

ひやつける空の朝からべったら市

もう一枚上からはおりべったら市

べったら市ひやつとする日続きけり

傘さしてべったら市の包み提げ

大伝馬町の路地抜けべったら市

べったら漬のほひ車中にひろがれり

客足もまづまづ雨のべったら市

べったら漬ずいと突出す赤半被

べったら市裸灯に透ける麴粒

掴み売る素手のむっちりべったら市

小伝馬町大伝馬町抜けべったら市

露地裏の小店に求むべったら漬

露地裏をべったら漬を提げ通る

どれも見目よくて山積みべったら漬

てらてらと値も手頃なるべったら漬

市初日べったら漬の値踏みせり

小太りのちよつと値の張るべったら漬

染抜きのべったら市の文字そぞろ寒

麴の香初冬の宵を早めけり

べったら市麴に交りおでんの香

雲行きの怪しきべったら市の空

帰りがけ降らるる羽目にべったら市

もちこたふべったら市の空模様

べつたら漬色白女将の腕ほど
べつたら漬いっぽん女将の手首ほど
浅漬けを麴まみれの素手掴み
真昼間のべつたら市に灯の入りぬ
小肥りの女将買うたるべつたら漬
べつたら市買ひ易さうな店選りて
人の背に蹤きて初日のべつたら市
地下鉄を出て鼻の先べつたら市
べつたら市べつたら市と訪ひ行きぬ
ぶらさげゆくべつたら漬の袋もの
味みてよとつまみあげたるべつたら漬
浅漬け売るこゑも初冬の響き帯ぶ
角店に人のはりつくべつたら市
べつたら市初日降ろうが曇ろうが
宮内庁御用の浅漬け売る店も
宮内庁御用のべつたら漬も売る
真昼間裸灯連ねてべつたら市
降りかけて直ぐ止む雨やべつたら市
べつたら市売口上の横一列
あびせらるべつたら市の売口上
昼月にべつたら市の店支度
べつたら市初日売声飛び交へる
妻の顔浮かぶべつたら漬を買ふ
売ごゑの味見味見とべつたら市
浅漬けの売声初冬の響きあり
そこらとは一味違ふ浅漬けぞ
浅漬けの樽樽のべつたら市
新宿のあたり初冬の雨霞
二日目のべつたら市は降られづめ
いわし雲天龍寺船穹を馳せ
節々に臙脂の入る川芒

家人よりけふよと云はれ後の月
鶏頭ののつべらぼうに後の月
五右衛門の釜焚きに遇ふ栗の虫
茹で栗を妻の分まで貰ひ受け
茹で栗に口ほころばす昼下り
榧の実のごろごろ道に辟易す
銀杏の皮剥き鼻が曲ろうと

銀杏を剥きはばからぬ不心得
夕鴟のけはしくなりぬ仁王門
夕楷樹紅葉一鳥放ちけり
自然薯堀むづかしき顔したりけり
自然薯堀潮時と腰上げにけり
自然薯をまだ堀りをりぬ藪向ふ
よう喋る自然薯堀にしてはよう
夕鴟の鳴くに仁王の力瘤
一山を仕切る高声あれば鴟
冬の蠅小さき翅を畳み込み
その翅では小さかるうが冬の蠅
顔洗ふ仕草幾たび冬の蠅
締り屋の鴟と思ふて暫し聞く
夕鴟の金切り声に村暮るる
太つちよの櫛を背にせる日向ぼこ
根回りもいかつき櫛冬に入る
根回りも古武士然たる冬櫛
松葉杖突いて銀杏拾ふ人
産土の主の櫛も紅葉せり
老若の櫛共々冬に入る
根の張りもさすがしたたか冬櫛
根回りにも老若ありて冬櫛
とてつものなき櫛の根回り冬日差
冬迎ふ櫛に老若美醜あり
榧の実の落ちて鈍き音又挙ぐる
落葉転がる音のさざなみなせりけり
枯櫛日差す根方を一巡り
木犀のいつときの花噴き出せり
木犀あり一っかけらも花とどめず
産土を鳩の滑走七五三
狛犬に十一月の櫛かけ
一番の冷え込みありぬ蔦紅葉
落葉風鳩の小首を吹きにけり
鳩の目の矯めつ眇めつ冬日向
宮鳩も瞬く今朝の寒さかな
産土の土擦り落葉駆けゆくも
春先に見当つけおく山芋(いも)を掘る
もくもくと土と取っ組む自然薯堀
自然薯掘りの土さくる音土落とす音

とつかかる自然薯掘りの一本目
気の早き九月の自然薯掘に遇ふ
長月の自然薯掘に遇ふ端山
末枯れ草渡り歩きの天道虫
次から次泡立草のかぶれ咲き
生真面目なひよる長自然薯掘り出せり
自然薯の蔓跡あればそこを掘る
晩酌のつまの山芋掘りに来し
この山の自然薯あらかた抜かれしよ
樗に手懸けてゆく年惜しみけり
葉を落とす根方に瘤を持つ樗
かさつける風を潜りて羽抜鳥
そこはかと落葉にほへり仁王門
鎌倉の古武士然たる枯樗
あかがねにならむと亀の甲羅干し
あかがねのつもりの亀の日向ぼこ
やうやうに自然薯掘り上げ一服す
着古しのセーターはおおり古本市
冬物の出し入れに妻余念なし
上掛けのずっしりと冬定まれる
もうそろそろなどと話して毛布のこと
夜の寒し一枚多くはおおり出づ
セーターの似合ふと云へば着替えけり
八つ手打つ雨に初冬の韻きあり
コップに張る水うつくしき九月かな
七五三日和と庭の空仰ぎ
七五三日和を鳩の群るる中
木犀の父情にも似て募れる香
木犀の例へて云へば深情
朝顔の種採らぬ訳ありぬべし
朝顔の忘れられぬ種零す
言づてをとんと忘れて帰り花
この山芋（いも）の根性曲り臍曲り
産土の樗大方もみぢせり
かまつかの盛りの花に身を晒す
かまつかに見透かされるおもひあり
閑散と鳩と落葉と石畳
セーター出すそんなきのうが過ぎてけふ

瀧

落つ瀧の国歌斉唱せるとし
一の瀧受けて二の瀧三の瀧
谿間にいつぽん通す瀧柱
瀧水に打たれし音を岩は秘め
鼓動して太古のこころ那智の瀧
いっときは瀧となる水大循環
おどろなる瀧水畳み畳みては
くりかへしくりかへし瀧澄める音を
水玉は華巖の螺髪瀧頭
こなごなに砕くるこころ瀧柱
山の水弾みごころの瀧頭
瀧曰く等身大のうた詠めと
ピッコロの音のごと瀧水跳ね回り
蒼天へ一本立ちの瀧柱
瀧の水弥陀の御衣をなせりけり
瀧水に応へてをりぬ磐頭
瀧音のいつしか五体通り抜け
長崎くんち
長崎くんちくんちくんちと鉦囃す
しよっぱなから降られ長崎くんちかな
おくんちの笠鉦頭領笠回す
秋雨の上がる広前唐子舞ふ
万屋町 潮吹き鯨
万屋町自慢の笠鉦魚づくし
小鯨の前曳（さきびき）たのし祭りの子
おくんちのカラクリ鯨潮を吹く
がらごろがら屋台鯨の引き回し
鯨捕り船頭頭の祝ひ唄
繰り出すは屋台鯨の親爺舟
どんどこと鯨の親爺鉦打ち舟
喝采に潮吹き足らぬ山車鯨
七浦をうるほす山車の鯨曳
シーボルト挿し絵に遺す鯨曳

広前にくんちの鯨引き出され
おくんちの潮吹き鯨潮まみれ
めいっばい踊り場使ひ鯨曳

本石灰町 御朱印船

御朱印船根曳き差配右左

山車船の御朱印船を「持ってこい」

祭足袋ばたばた御朱印船を曳く

天川（あまかわ）の奉納安南王家より

天川は長崎でシックイのこと

印度人の傘持御朱印船上に

紅潮し御朱印船の根曳衆

荒木宗太郎便乗

日本の秋一見と遠眼鏡

船大工町 川船

船大工町の山車舟繰り出せり

栄町 阿蘭陀万才

阿蘭陀万才手書きの髭も爽やかに
あっぱれの阿蘭陀万才秋天下

お風入れ

一つ落ちて二つ残れるくわりんかな

時頼像方丈に在すお風入れ

大樗もみづる「天下禅林」に

方丈のうしろの樗もみづれり

もみづれるものに地獄の釜の蓋

夕鴟に句ごころ搔き立てられにけり

夕鴟に五山巡りの気を削がれ

風入れの瑞鹿山をうち過ぎて

高齢化社会と百舌啼けり

十一月しよっぱなの風邪貰ひけり

禅林に夕鴟のこゑ徹りけり

蘭溪道隆忌日 八月二十三日

妙鉢をじゃんじゃらじゃんと道隆忌

くしゃみして十一月に入りにけり

お風入れ慧可のぎよる目に立ちすくむ

風入れの朱衣達磨百舌聴けり

二々もとの樗もみぢの色違ひ

お風入れ道隆さまの洗面具

開山の袈裟環・鶏口お風入れ

龍淵に潜む禅師の念持仏

念珠・払子・大硯虫干し日和なり

虫干しの開山語録と韓櫃と

白描の三つ目の白沢（はくたく）お風入れ

白沢は中国で想像上の神獣。よく人語を解

し

有徳の王者の治世に出現。建長寺では風入

れ

の守護神とする

沢庵の寄進牡丹圖お風入れ

無準師範筆「菩提」

ぐぐぐいと引ける墨跡お風入れ

巨福呂坂百舌に鳴かれて下りけり

風の他触るるものなき芙蓉の實

菊花展卒業式のごとくなり

火の気無き焚火の跡でありにけり

飯桐に大甕のごと空冷えて

柏槇の古木に鴟の暫し鳴く

訪うならば樗もみぢの頃がよし

蔓置いて何處へ失せたる烏瓜

重さうに夕鴟スイングして飛べり

花びらのよじれ直して嵯峨菊咲く

夕鴟をじつくり聞けり方丈に

虫干しの家康公の狸顔

ほぐれ初む嵯峨菊荅おひねりめく

山芋の黄葉せる道のみけり

烏瓜からす天狗が好物の

からす天狗籠れる山の烏瓜

破れ着の大燈国師めく芭蕉

枯れ三昧一人愉しみ居る芭蕉

建長興国禅寺破格の枯芭蕉

この寺に生まれ破格の枯芭蕉

淋しさのひとかたまりに枯芭蕉

とてつものなき枯草にして破芭蕉

おんぼろの草のばけもの破芭蕉

全うの一語に尽きぬ枯芭蕉

歳末のポインセチアの包装紙

てっぺんから爪先かけて芭蕉枯れ

蘆隠り野鳥の第二観察小屋

尻振りて玩具めく鴨近寄り来

鴨となり吾も水面を馳すおもひ

沢蟹の面テを起こす山毛樗黄葉

面目をほどこす一句鴟より得

菊花展

昼休み日比谷公園菊見せり

警官の立ち寄る公園菊花展

賞とる菊中国語にて讚ふにや

その菊苗だるまにしても大丈夫よ

菊に何やら語りかけをる仏蘭西人

盆栽の黄菊明治神宮賞射止む

かかるのは手間のみ「如何菊作り」

菊作り答えがでると勧めをり

冬至芽の此処をと盆栽菊談義

菊展の菊に囲まれ晴れがまし

吾もまたいつしか老人菊に立つ
菊に立つ人の影さへ奥ゆかし
アンドロメダ星雲さながら懸崖は
厚物のはた管物の都知事賞
剪り花の菊の大首艶競ふ
横綱てふその名に恥じず受賞菊
槐の実東京タワーまであるく
綿詰めがどうかうのと一文字菊（いちも
んじ）

管物の菊に木洩れ日懸りけり
煌々と厚物白菊スプーン弁
環境庁長官賞に輝く菊

歌麿といふ菊愛（めぐ）し菊花展
尊王といふ菊苗の畏くも
酒仙てふその名がよくて菊苗買う
菊作り教室の菊人集め

百日で優（やさ）福助に仕上がれる
福助の鉢より大きな花掲げ
一文字菊（いちもんじ）出来たり舟型十五
弁

晴れ舞台てふ菊苗の色を聞く
菊一つ一つに名あり領けり
咲き方も大胆にして「大掴み」
何處となう畏き菊の前に立ち

見事なる一本菊の苗見本
嵯峨菊はシテのごとくに咲きすすむ
菊花展葎實巡らしお膳立
審査員何處見て菊の出来不出来

堅物は菊にもありて塵寄せず
栄達を思ってもみぬ菊ぞ佳し
望外の受賞と云はんばかりの菊
型通り並べて菊花展の菊
近習を待らすごとく菊仕立
要するに何處どう見ればよきや菊
菊人形魂入るる道具立て

鞍馬火祭り

火祭りのふどし男に火の粉とぶ

火祭の火龍となりて大焰
松明の爆せてぐらつく火の祭
火祭の松明傾けてはならじ
軒先の提灯明り火祭果つ
松明の皆燃え尽きて火祭了ゆ
火祭の火屑ばらばら顔焦がす
火をもつて鞍馬一円浄めたり
松明の胴を括るに藤の蔓
祭り来て鞍馬のお山火に浄む
百貫神輿鈴下を昇く佳き男
はな鈴下へちは神輿を担ぐ位置をさす
はなは先端 鈴下は中央 へちは後方
ちよっぺんの股に鞍馬の火明りす
ちよっぺんは成人式の儀式 成人に
なる者が神輿の先端に股をひらいてぶるさ
がる

蝶鉾も火に酔ふ鞍馬火の祭
鞍馬火祭り山門焦がさんばかりなり
諸礼述べ火祭り仲間合流す

代々の鞍馬の松明作りかな
芝刈つて鞍馬の松明作りかな
松明の火の粉とび散る火の祭
松明を藤の根蔓に繰る祭

ぐらぐらと鞍馬の空を火の煽る
りようらんと鞍馬の空を煽れる火
千本の松明掲げ火の祭

天狗の疇透けんばかりに火の祭
篝火と提灯に更く鞍馬村

言い訳めく啼き方なんぞ鳴はせず
火祭りの火の粉まみれに鞍馬の子
注連切りを済ませ祭りの酣に

火祭りの火舁き男の武者草鞋
松明を舁き来る鞍馬の七仲間
火祭りの火の続々と山門前

とっくりに親の付き添ふ火の祭
とっくりを背ふ豆紋り鞍馬の子

とっくりは火祭り小学生以下が背負う
松明。形状はとっくり型。

御旅所の七本立ちの大松明

火祭りの十貫松明高掲げ
火祭りの汗と怒号の鞍馬山
火祭りを煽る「サイレイサイリョウ」と
火祭りの火埃浴びて鉾すすむ

松明を手に手に火祭鞍馬衆
鼻風邪の鼻にかかりて頼み事
狸々の一物突出せる真冬
寒ければ己鼓舞する言吐きて
画一を徹底的に嫌ふ鴟
蠅叩茶碗巻き添え喰ひにけり
野菜涅槃凶葱の高足侍りけり
綱引のづるづる旗色悪くなる
年の瀬の髪を刈り来てこざっぱり
鴟は聞き入れぬ入れぬの一点張り
七五三祈袴畏き辺りにて
顔に受く二日の日差し面白し
必殺を目論む妻の蠅叩
枳殻に鴟の手仕事鴟の贅
ベルギー製ビール
こだはりの職人気質のビール酌む
ブリュッゲルのビア樽男ビール酌む
交し飲むビールの琥珀胃の琥珀
花八つ手こうこはどうこのほそみちじや
黄落の銀杏を仰ぐ鳩のごと

しなやかさ海草に似て冬青草
 冬草の穂先鋭く光帯ぶ
 冬青草細葉吹かれてきらめく針
 葉はすがれ紫じみし草の丈
 秋草の紫じみし茎吹かれ
 犬の名と猫の名ゆかりのゑのこ草
 英名は緑の狐のしっぽ草
 風邪引きの力つけんと蟹雑炊
 蟹雑炊風邪引く妻と差し向ひ
 長たらしき名を持ち背高泡立草
 上背のあればやアキノキリン草
 風体をとやかく云はれ破芭蕉
 すがれても残菊の色確かなり
 世間体一笑に付す石榴の実
 生酔いの箸運びけり柿膾
 鼻風邪の妻に味見を頼まれぬ
 注連飾り手っ取り早く済ませけり
 内祝ポインセチアを買うて来ぬ
 鴟が鴟にちよっかい出して遣合へり
 白菊に見合へる母の背格好
 鴟一声直答返すごとくなり
 見栄坊の烏瓜村はづれにも
 逆上の鴟の癩癩玉破裂
 恋猫の別誂えの声を出す
 中に一つ瓜実顔の隼人瓜
 鼻風邪の妻の言づて事細か
 村はづれ一人天下の烏瓜
 老先はまだまだ先よ八っ手咲く
 略式の茶席といへどそぞろ寒
 紐あるごと零余子芋蔓式に落つ
 鼻風邪の寝付きよければ直るべし
 手ほどきの菊の三本仕立てはかう
 略服に済ますもよけれ七五三
 先着の鴨の一隊中州占め
 凡百の鴨の真中に鷺の立つ
 荻叢の水辺を鷺の物色す
 枝先の柿を採らんと命懸
 花すすき四五本手折る帰りがけ

掛かり付け大田医院の八っ手咲く
 鼻風邪の鼻声風邪が抜けぬと云う
 目白らが逃げないやうに眼で答え
 タタツキルタノヒビキモテ鴟啼ケリ
 相撲秋場所モンゴル生まれとハワイ生まれ
 石路の花世間話をせるごとく
 生干しの白子に時化て走る波
 蜆盛り歳末商戦始まれり
 ずたずたに破れ着芭蕉雨晒し
 景気上向く兆しもみえず枇杷の花
 冬草の葉を吹く光切返す
 花ひひらぎ昼から天気持ち直す
 隼人瓜午から気色とりなおす
 花八っ手二度ほど咲いて三回忌
 ずぶ濡れの鴟の平氣の平左かな
 餅恋しあんこ力士の居りし世も

鬼怒川温泉 湯西川温泉 川治温泉
 楢山の楢枯れ木（ボク）に還るころ
 温泉（ゆ）巡りの一人旅には濁酒
 友垣の一人よ旅の濁り酒
 湯どころに一人なぐさむ濁り酒
 ほうき茸ほうきの先を指に乗せ
 炭焼の木の混める山遣りしか
 木訥の木（ボク）の心をもて枯木
 僕キツネ私タヌキで店師走
 強霜を振りかぶる村朝日差す
 茸の名いちいち聞いて茸鍋
 炭焼の裔の落人村に泊つ
 霜解けの木雫きららまたぎ村
 枯木宿キツと秒針時刻む
 宿炬燵山の長夜を如何にせん
 紅葉谿野岩鉄道錆鉄橋
 霜降りぬ遠ちの空林空山に
 朝日さす霜の空林空山に
 舞茸は杉葉をかむり土産籠
 ひら茸を栗茸を指す箸の先

箒茸抛り込んだるぐらぐら鍋
山の出湯浴みてバリバリしばれ髪
山宿の障子に夕日暫し映え
鍋物はおらが在所の茸攻め
山鳥の脂浮くなりきのこ汁
茸には山鳥の合ふあつあつ鍋
茸の名いちいち聞いて宿夕餉
山宿の炬燵火熾り真っ赤っか
一匹だに魚影の見えぬ枯木谿
高手
木の葉降るお品と嘉助の山墓に
枯れ木（ボク）の山毛櫨のおいらん木杓子
かな
木の実どき木地師丸める当り棒
栓の木の盆におかわり枯木宿
山宿の炬燵に俄湯冷め身
平家落人村
今日は枯野に枕す野州湯西川
山宿の炬燵の酔ひがまはりけり
濁り酒とろつと炬燵火はかつと
山宿の炬燵と夜を俱にせり
一人酔ふ夜の又よろし濁り酒
魚潜む川あり山も枯れ深む
このぬくさ足覚えをり初炬燵
炬燵火をいっそう強くまたぎ村
木の実どき落葉どき過ぎ落人村
前山に初雪ありぬ眩しみぬ
楢山は尾羽うち枯らす山となり
天辺はもう枯れ初めぬ紅葉山
紅葉山一つ隣の山枯れて
朴落葉ざつと千枚日陰道
何の木か白臘いろに黄葉せり
涸れ川の岩又岩の橡落葉
川風に落葉吹き飛ぶ露天風呂
枯山の重畳落人村に入る
山並みにまだ日の差せる夕紅葉
山間の一軒宿の冬紅葉
心臓を病みて十年紅葉狩り
枯木抜け川原へ透る夕日差

いのこずち何時より汝と道連れに
箒茸舞茸平茸買ひ迷ふ
枯山を渡り歩けば眼も枯れて
杉叢の幽明昇る蔦紅葉
日は傾きゑのころ草の幽明に
天辺に楢の枯葉の一二枚
白骨の楢の枯木をデッサンす
しろしろと霜強き日の楢の幹
枯蔓に谷川の音韻きけり
桐の木の日と睦みある上枝
水楢の高々黄葉仰ぎけり
落葉の時雨梢を渡る音暫し
ばさと落ち天狗の団扇めく落葉
南平山 平家埋蔵金伝説
黄葉せり平家の黄金埋もる山
道迷ふ朴の朽葉の幽界に
楢山の枯れ日向朝日受け
葉脈に強霜の頭つ朴落葉
大椀を伏せし容に枯木山
湯煙も枯山色をして出湯
落葉道吾が足音を聞くばかり
さくさくと走り根ひそむ落葉みち
落葉みち続き煙草火どうしよう
落葉みち温泉（ゆ）にゐるこちまだ続く
出湯出て空つ風背に受けゆけり
枯尾花漂ひ初めぬ落人村
山茶花の白し自決の世は絶えて
茸採りいやになるほど落葉踏み
温泉駅前の楓の冬紅葉
日光にととう着きぬ冬紅葉
投函の小銭ひやく共同湯
湯の宿のロビーの鉢の猩々木
鶴鴿のつつつつ霜の岩畳
霜の日の下野新聞ひろげたり
霜を置く屋根のいちめん出湯の里
前山のぼかぼか黄葉共同湯
踏みごこち愉しみながら落葉みち
編みシューズ落葉の匂ひかきたてて
林間の風に落葉の一二転

枯尾花のすれっからしの穂先見よ
枯草のうち伏すさまもありありと
枯木山夕日が外れ俄寒む
共同湯木戸開け着膨れ婆ぬつと
撥のごと落葉降るなり落人村
寄生木にぐるり榎山枯れ始む
光芒を放ちつつ昏れ枯木山
枯木風日に三便のバス待てり
露天湯の首の上なる枯木空
夕日差いま枯山の八合目
枯山の出湯名付けて薬研の湯
夕鴉にすつと湯ぼてり引きにけり
温泉（ゆ）が好きで落葉の頃の出湯巡り
共同湯屋根の落葉の分厚かり
樺の果穂これから山に雪が降る
盤台餅竹串に枯れ及びびて
黒土の畝沿ひからまつ落葉せり
ずんぐりと榎の前山枯れ一色
枯山の頭が見え山の共同湯
枯山を歩き来し身の湯に痺れ
共同湯戸口開ければ枯木風
アミ・フクロ・ホウキ茸等売られけり
一枚ベラ味噌ベラ造り山枯れどき
榎山毛櫟の落葉や落人村歩く
この枯木その枯木にも寄生木が
山毛櫟枯葉山の日差しに背を丸め
山の出湯じんじん沁みる枯木どき
露天湯の岩場の蔭に冬草生ふ
露天湯の落葉の側に身を沈め
露天湯に木の葉共々浮かびをり
舞上がるこち山枯れどきの温泉（ゆ）に
湯煙の翩翩冬雲の団々
湧水の音の何處かで山毛櫟枯木
涸れ川を挟み二つの露天風呂
枯るる身に熱湯をこそ山の出湯
露天風呂冬の河原の風を入れ
枯尾花いっぽん昏るる空ありぬ
舞い込める山の落葉と露天湯に
露天湯のあふれこぼるる湯と落葉

またぎ村前山も枯れ急ぎをり
冬菜干す山家薪を山と積み
前山を一望にせり枯木風
葉形に覚えのありて通草蔓
匂ひつく枯山を背に一軒宿
蔦黄葉一二三と駆けのぼる
枯山をはたと羽音の発ちゆける
いのこずち汝と何時より道連れか
がまづみの消え入りそうに霜置く実
枯れ蔓のざんばら髪も落人村
枯蔓の幾筋混迷深めけり
拾ひ上ぐ紅葉の中の艶（あで）紅葉
枯蔓の横暴極まりなき立木
観音堂櫟落葉に埋もる道
前山に向ひ冬菜を洗ひをり
舞茸のうづくまりある鼠色
枯蔓の根の断ち切れ断末魔
枯蔓の末路を晒す川つぶち
林間を覗き込み云ふ谿の雪
前山の雪を指さし山人は
枯蔓の幹に食い込む莫迦力
熊四手の冬芽の側に枯るる果穂
犬の踏む櫟落葉の音ぬくげ
向ひ嶺に初雪を見ぬ椎茸櫟
崖下の川沿ひ日陰の枯木谿
一つ木に集ふ鳥と柿の数
柿の木を発ちて鴨柿の木へ
強霜の早朝バスに乗り山中
日が落ちるどんだん落ちるおけさ柿
柿の木から柿の木へ鴨飛翔中
ずんぐりの発電パイプ山もみぢ
残菊の色を譲りて霜のいろ
残菊にうつすら霜のいろ載れり
村中の霜の道来て共同湯
村人のわいわい霜の共同湯
山の出湯霜にこはばる身をほぐす
強霜に湯煙山の生活あり
とんがれる雑木冬芽に霜降りて
冬靄のわきあいあいの川景色

霜の橋旭当れば旭橋

せきれいの霜の色して岩畳

霜降りて枯木枯蔓枯るる山

せきれいの腹より白きけさの霜

小学校見下ろす楢の枯木山

枯木道肩より湯冷めしたりけり

共同湯霜にしばれし身を沈め

着膨れ婆身ぐるみ脱いで共同湯

いただいて落葉の匂ふ共同湯

他所者の厚着もこもこ共同湯

またぎ村強霜の日の射し込める

強霜の一村朝日差し込める

霜解けの湯気と外湯の湯煙と

上々に紅葉仕上がり龍王峽

逗子端山散策

息づける紅葉に急所あるごとし
 もみづれる檜桂に兄事せる
 気前よく檜は落葉降らすなり
 神業の柱状節理崖紅葉
 齒朶に手をかけて上れり落葉沢
 落葉の中縷々と動くは沢の水
 落葉沢動くは沢の水なりけり
 木の實どき山道展け軍港見ゆ
 庚申塔うち過ぎ落葉深き道
 鳥ごゑの鋭くなりぬ山もみぢ
 太蔓を細蔓伝ひのぼりけり
 源流はここらとおもふ落葉沢
 草の絮吹いて三崎の山歩き
 幾たびも霜降りにけり赤のまま
 山歩き自然薯黄葉せる道を
 かうもりのやうに枯るる葉ありにけり
 夕鴟に黄葉明りの道下る
 猫じゃらし枯れ伏す夕日も頼りなげ
 梢打つ落葉時雨や風の道
 ほうほうと云ひて拾へる朴落葉
 日陰れば足早に過ぎ落葉道
 ここに堰落葉筏を浮かべけり
 枯尾花いちめんの日に酔ふごとし
 冬日得ていま恍惚の芒かな
 千尋の谷へ抛れる朴落葉
 落葉道今年の落葉踏みゆけり
 落葉道犬の踏みゆく音ぬくげ
 芒の姥荻の遠叔父民話の里
 ひそひそと落葉を潜り谷の水
 透き透きて黄葉の山のしぼり水
 林道の細長落葉丸落葉
 人影がふつとかき消え落葉道
 爺（じい）さまの口許に似て隼人瓜
 水仙の葉叢葉叢に初冬の日
 呆けては化けて出さうな猫じゃらし
 とうねずみもちの實日差し冬めきぬ

柚子畑に注ぐ山の日万遍なく
 赤のまま潰へるまでのさくら色
 走り根もあらはに落葉の岩場道
 岩がちの山道落葉深き道
 ユリの木の皆落葉して木偶の坊
 花八つ手夢ある年を迎へけり
 山道はすっかり日陰枯尾花
 蟻螂の翅まだ青き十二月
 種の飛び方いろいろありて草の実展
 トントんと酔牡蠣に弾む独り酒
 シクラメンぼかしてポトレート撮る
 頭から風に崩るる枯葎
 いっぱんの庭木裸木とはなれり
 裸木となりゆく木々に素性あり
 玄関の淋しければとシクラメン
 櫟の実口に含みしリスの頬
 地震幾つもありて歳末義捐金
 啼く鳥のあけつびろげに黄葉山
 産土の年逝く闇を見通せり
 裸木の枝先の葉の震ひづめ
 裸木を日の滑り落つ午後三時
 裸木の光と蔭の部分かな
 櫟日和小櫛日和の山歩き
 草の絮乗せて運べる水の面
 櫟の実掌にして暫し歩みけり
 数え日の胸膨らます鳩と居り
 いっぱんの裸木の幹隆々と
 身心も黄葉も脱落せるはよし
 黄落の山鳥もまた昼餉とる
 青空に飛距離を伸す櫟の葉
 青空に落葉終りし櫟の頭
 櫟の葉日に丸まって枯木山
 がまづみの實やこの谿の鳥たちに
 林間に実生の櫟紅葉して
 がまづみを漁れる小鳥無我夢中
 檜櫟もみぢ色合ひ異にせる
 日溜りのここに屯す烏瓜
 栃冬芽鋭くなりし鳥のこゑ
 烏瓜のからから枯葉手に揉めり

おーい枯櫟の空をゆく雲よ
櫟林素通しに見ゆ冬青空
あけすけに団栗の木と冬青空
落葉道どっこいここに走り根が
走り根の縦横無尽落葉みち
大櫟もみぢいっぽん谿を統べ
頭を掠め空林に入る冬の禽
鳥キツとキツと黄葉の谿のぼる
櫟黄葉さわさわと山渡る風
冬青空アミメキリンの首を容れ
山もみぢ鳥はスウイングして翔べり
山鳥のこゑも染まれり谿紅葉
髪刈って頭の頼りなき冬青空
冬薔薇いよいよ年の空深く
葉牡丹の葉の縮み込む朝なりけり
日表に櫟もみぢの櫟いろ
大霜の羽田へ電車潜り着く
心臓の葉に加へ風邪葉

酉の市 横浜真金町 浅草

真金町交番裏のお酉さま
挿絵めく赤提灯や酉の市
三つ目で地下鉄を降り酉の市
二の酉の灯を搔き立てり枯木風
神鈴の三つせはしきお酉さま
細路地をひよいと出た処お酉さま
灯が点り枯木の間のお酉さま
お酉さま戻りの道の落葉風
すいと二の酉宵のかぜ
半月に風の納まる酉の市
二の酉の夜風が頬にひんやりす
熊手売また来年もと礼深く
熊手売ここ一番のゑびす顔
新旧の熊手高々行き交へる
熊手選る人品いやしからぬ人
熊手の値むにやむにや云へば「そりや無理
だ」
縁起物働き者の熊手だよ

熊手また売れたり火打ち石をちよい
熊手売手締めもありやこりやこりや
と

大熊手もう一押しに値の決まる
値のあつて値の無き熊手よく売るよ
むにやむにやとやるうち熊手に値のついた
とつくりセーター人並みをゆく酉の市
熊手買ふ気つぶのよさが身上ぞ
射的屋の音の中抜けお酉さま
大熊手売れて柏手よよいのよい
柏手のずんと弾みて一の酉
売約済み熊手どでんと真ん中に
手締めには手締めの応酬一の酉
手締めにも多彩な調子一の酉
高々と熊手は掲げゆくものなり
酉の市人の流れに蹤くばかり
景気よくなれと熊手を奮発す

酉の市おかめ仰ぎて懐手

酉の市市のぐるぐる迷路かな

酉の市抜けて鳩とぶ浅草寺

熊手売れ手締めさざなみなせりけり

にぎにぎしく熊手鯛やら小判やら

昔簡素今は派手派手熊手かな

熊手売手持ちぶさたの股火鉢

ぶつかられ躰くるりと酉の市

巫女の売るかっこみ熊手よく売れる

浅草に冬が来た来た暦売

どれにしようずんと下がって熊手見る

派手好きの御代のきらきら熊手かな

一の酉親爺ハリキリ豆絞り

もういっぽん先の道だよ酉の市

酉の市土産いなごの佃煮など

客足のこれからこれから三の酉

極月のちよろちよろ動くおもちゃかな

新仲見世仲見世抜けて羽子板市

酉の市何を買ふやら道草す

夫婦して天気よければ三の酉

客足のパツタリ三の酉昼ヤツ

左手に熊手右手に切山椒
一仕事せしごと熊手負ふてくる
極月のマツチの頭真つ赤つか
極月の火に煽られて中華鍋
浅草の師走に遊び牛鍋屋
大将の熊手の出来も惚れ惚れと
熊手持つ拳と拳行き交へり
小さくともともかく熊手買ひ求め
風呂敷をすっぽり懸けて熊手持つ
酉の市ゆきつくまでに人疲れ
熊手選る粹な其角の心意気
定年の一年前の冬紅葉
つつましき熊手と云へどいい値段
熊手来る又その向かう熊手来る
花屋敷冬の日の乗る観覧車
人波に逆らひゆける三の酉
酉の市口八丁の七味売
仲見世に吊られ師走の陣羽織
仲見世の猿のおもちやに小春の日
雷門大提灯に冬日差す
雷門ずんずん過ぎて酉の市
熊手の値鳩のごとくにパチクリす
雷門脇の日向の師走猫
アストルピアソラ賛歌
コントラバス靴底でとるリズム冴ゆ
レーニン風唄い手の額灯に冴えて
街の木は枯れてタンゴの鼻濁音
バンドネオン挑発ガウチヨの嘆き冴ゆ
路上に舞ふ落葉とブエノスアイレスの雀
ブエノスアイレス負け犬に吹く秋の風
枯るる夜をジーラジーラと唄い出す
やせぼっちのキリストを吹く枯木風
口許が割れて洩れだす夜のタンゴ
ジョーカーの裏でくすりと夜の笑ふ
バイオリンずいこずいこと颱風ひく
バンドネオンに翼枯木の空を舞ふ

鶺鴒の木でさんざん啼いて鴉去れり
啼き足らぬ鴉が梢に姿見せ
夕鴉の頭がちよこまかと鶺鴒の梢
待ちをればもう来ぬ鴉の天の邪鬼
庭に来る鴉のぱったり夕凍み来
今年また生るだけの柿生りにけり
戸隠に来る朝早く水冷た
前衛に言葉の捻挫派脱臼派
一段と強羅辺りの遅紅葉
神品の桂黄葉とうち仰ぎ
機転利く銀杏黄葉と思へもす
二大樹の銀杏黄葉の消耗戦
よく啼ける隣家の鴉の相手方
向かう見ず鴉濡れそぼち胴震ひ
喧屋鴉がしのごの云ふてをり
産土の落葉総嘗め紅蓮の炎
立ち竦む故に吾あり大馬陸
時ならぬ鴉のこゑして庭に出づ
綺麗事みんなつまらぬ衣被
期せずしていてふ落葉を浴びにけり
鼻風邪を追出す手だてなかりけり
婆の云う
芋植うも利発なりスにしてやられ
言ひ放つ言頼しき新走り
べつたら市麴てかてか粒立てり
平日の鴉聞きながら稿急ぐ
鴉連日近所にこゑを通しけり
桜もみぢどつちつかずの色合にて
怪光を放てるゴジラ円朝忌
黄葉どき桂の高風慕ひけり
乱入の鴉の雄叫びとも聞え
鴉が贅力づくにて作りしよ
郷土色豊かな柿が回れり
産土のいてふが散りて一段落